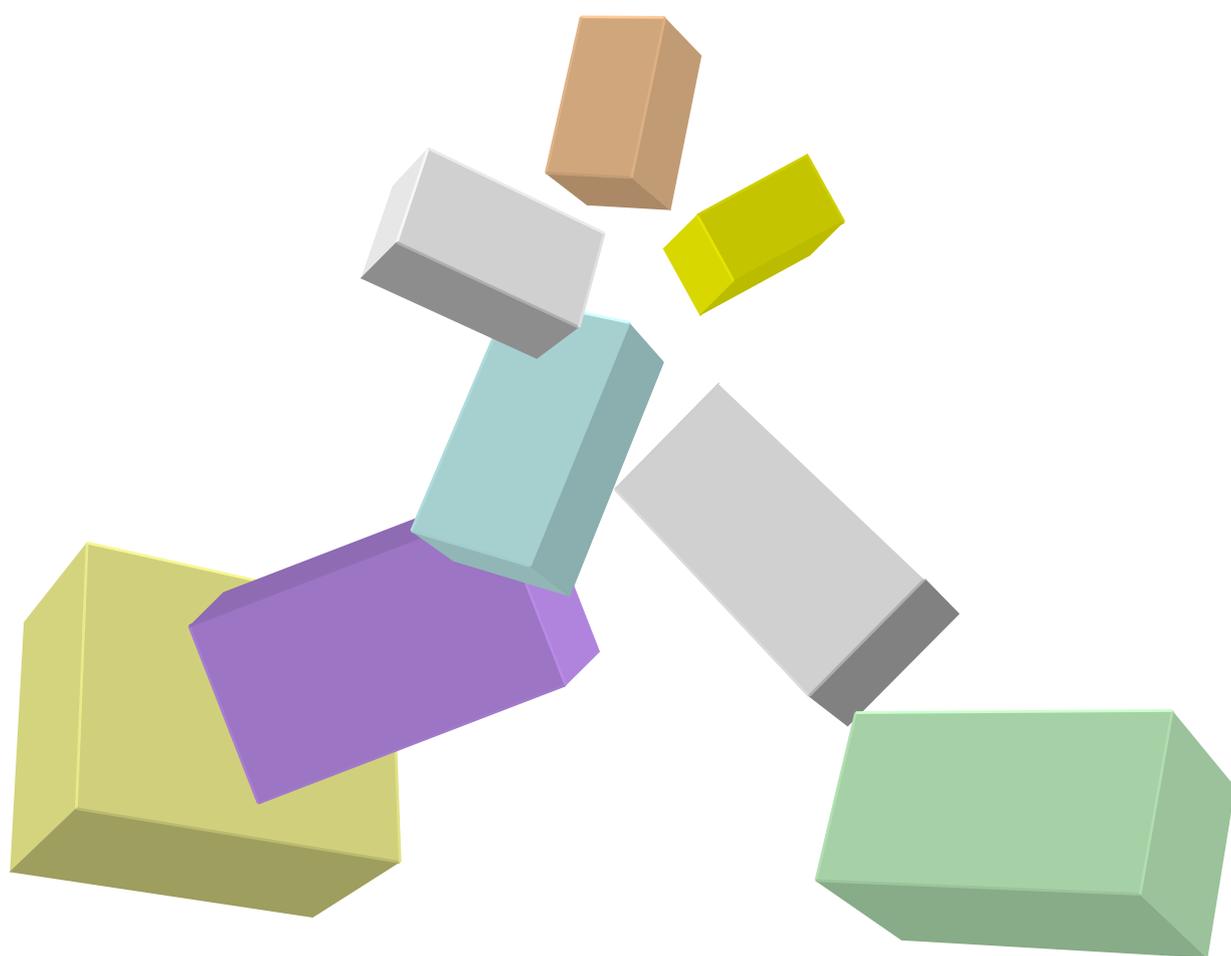


平成18年度
総合的な学習の時間コーディネーター養成講座

実施報告書



香川県教育委員会

はじめに

総合的な学習の時間の全面実施から5年が過ぎようとしています。この間、特色ある学校づくりをめざし、県下の多くの小中学校から、その趣旨やねらいを踏まえた多様な学習活動の様子が報告されているところです。

総合的な学習の時間は、各学校が、地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動が行えるように、平成10年の学習指導要領の改訂において新たに創設され、平成14年4月1日から全面実施されました。

平成15年12月に、学習指導要領の一部改正が行われ、総合的な学習の時間では、各教科や道徳、特別活動で身に付けた知識や技能等を関連付け、学習や生活に生かし総合的に働くようにすることがこの時間のねらいであること、各学校において目標及び内容を定めるとともにこの時間の全体計画を作成する必要があること、教師が適切な指導を行うとともに学校内外の教育資源の積極的な活用などを工夫する必要があることについて明確な位置付けがなされ、一層の充実が図られてきたところです。

そのような中、総合的な学習の時間の必要性や重要性については共通理解が得られるようになりましたが、準備・計画の負担が重い、教科の時間との関係の整理など実施上の課題も生じているところです。

文部科学省では、これまでも優れた先進事例の紹介等が行われて参りましたが、本年度より全国47都道府県において、学校として総合的な学習の時間に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターを養成し、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資することを趣旨とした「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」を実施することとなりました。

県教育委員会では、県下の小中学校教員100名あまりを対象に、講義、ワークショップ、公開授業の参観、講演の聴講など多様な形式を取り入れた4回の養成講座を開設し、総合的な学習の時間の工夫改善について研修いたしました。

本実践報告書は、その4回の研修講座に参加した受講生の報告書や研修レポートで構成しています。総合的な学習の時間のコーディネーター養成が目的とされた研修ではありますが、研修内容は、各学校の今後の総合的な学習の時間の在り方を示唆するものであり、たいへん参考になると考えております。ぜひ、本実践報告書を活用いただき、自校の総合的な学習の時間の一層の充実に取り組んでいくことを願っております。

最後になりましたが、本講座を実施するに当たって、香川大学教育学部附属教育実践総合センター田上 哲助教授、高松市立屋島西小学校、香川県教育センターには多大な御協力をいただきましたことに感謝を申し上げます。

平成19年3月

香川県教育委員会事務局義務教育課

課長 吉田光成

目 次

はじめに

目 次

平成18年度香川県「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」実施要項・・・	1
平成18年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座日程	・・・ 3
第1回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から	・・・ 5
・総合的な学習の時間の現状と課題	
・「総合的な学習の時間」のコーディネーター	
・自校の「総合的な学習の時間」をコーディネーターの視点から検証する	
第2回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から	・・・ 13
・総合的な学習の時間コーディネーターについて考える	
・自校の総合的な学習の時間の見直し、コーディネーターの視点に立った 自校の特色を生かした総合的な学習の時間の改善・改善策の交流	
・コーディネーターの視点から見る授業参観のポイント	
第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から	・・・ 21
実践発表会から学ぶ	
・「研究発表」から学ぶ	
・「提案授業」から学ぶ	
・「講師に聴く」から学ぶ	
第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から	・・・ 29
教育講演から学ぶ	
研修レポートの作成	・・・ 37
平成18年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座を受講して	・・・ 50
アンケート結果の概要	

この実践報告書は、受講生の研修報告書に記載された内容で大部分を構成しています。記事内容から一部学校が特定される場合もありますが、原則、校名、受講者名をふせていますことをご了承願います。

平成18年度

香川県「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」実施要項

香川県教育委員会事務局義務教育課

1 趣旨

県内の各小・中学校の教員等を対象に、学校として総合的な学習の時間に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターの養成を行い、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資する。

2 主催

文部科学省 香川県教育委員会事務局義務教育課

3 受講者

総合的な学習の時間コーディネーターとして、各教育事務所が推薦した学校の教務主任、現職教育主任、総合的な学習の時間担当者のうち、1名。ただし、4日間の講座をすべて受講できる者。

4 推薦手続、受講者について

- ・ 各教育事務所は、管内の小中学校において積極的に総合的な学習の時間を推進している学校及びその学校の受講者1名を選定し、別紙様式1により義務教育課に提出する。
- ・ 義務教育課は、推薦表受理後、受講対象校及び受講者を確認し、関係教育委員会、関係小・中学校、各教育事務所に通知する。

5 開講日

香川県教育委員会において別途定める。

6 研修講座の内容

(1) 総合的な学習の時間の意義、現状と課題に関すること

- ・ 総合的な学習の時間の教育課程上の位置付け、趣旨、ねらい
- ・ 総合的な学習の時間の現状と課題
- ・ 総合的な学習の時間におけるコーディネーターの役割

(2) 計画作成とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 全体計画、指導計画の作成
- ・ 校内体制の整備、校内組織の作り方、校内研修の進め方
- ・ 施設・設備などの学習環境の整備・活用
- ・ 地域人材の活用、地域との連携、学校外との調整の進め方

(3) 授業の実施とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 教材の開発
- ・ 指導方法や指導評価の工夫

(4) カリキュラム評価・改善とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 評価資料の収集・検討
- ・ 改善案の作成・検討

7 研修講座にあたって

- (1) 研修講座は、内容の(2)「計画作成とコーディネーターの役割に関すること」を重点とする。
- (2) 実施にあたっては、演習を取り入れたり、公開授業の参観を取り入れたりするなど運営を工夫する。
- (3) 研修講座の事前事後にアンケート(意識調査)を実施し、研修講座の評価を実施する。
- (4) 受講生は、毎回の研修後には研修報告書を、また、研修終了後決められた期日までに実践記録を提出する。研修報告書、実践記録の様式は別途周知する。

8 経費

文部科学省は、本講座の実施に要する経費について、県が行う国の会計事務として支出する経費とする。ただし、受講生の旅費は含まれない。

9 その他

- (1) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省の必要に応じ、本講座の進捗状況及び経費事務処理状況について事態調査を受ける。
- (2) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省が行う特に効果的な研修の事例の収集やその公開及び共有について協力する。
- (3) この要項に定めのない事項で事業の実施に必要な事項は、必要に応じ、香川県教育委員会事務局義務教育課が別に指示する。

平成18年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第1回・第2回 日程

第1回 10月27日(金) 13:00~16:30 (会場:高松商工会議所会館 大ホール)		第2回 11月7日(火) 13:00~16:30 (会場:県民ホール 北館4階大会議室)	
時間	内 容	時間	内 容
13:00	受付	13:00	受付
13:15	開 会 研修の趣旨説明 研修日程について	13:15	開 会 日程説明
13:25	研修1「総合的な学習の時間の現状と課題」 ・中教審の審議経過報告から ・県内の実施状況 ・コーディネーターに期待すること	13:25	研修1「計画作成とコーディネーターの役割 2」 ・校内体制の整備、校内の組織・校内研究の進め方 ・地域人材の活用、地域との連携のあり方
14:00	研修2「計画作成とコーディネーターの役割 1」 ・全体計画の作成上の工夫・改善 ・目標及び内容 ・育てようとする資質や能力 ・指導体制 ・年間指導計画の作成上の工夫・改善 ・各教科等との関連 ・各学年間との関連 ・小中との関連	14:30	研修2「カリキュラムの評価・改善」 ・児童生徒の評価の在り方 ・カリキュラム評価の在り方
(休憩 15分)		(休憩 15分)	
	講義指導 香川大学 附属教育実践総合センター 田上 哲 助教授		講義指導 香川大学 附属教育実践総合センター 田上 哲 助教授
16:20	事務連絡	16:20	事務連絡
16:30	閉会	16:30	閉会

平成18年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第3回・第4回 日程

第3回 11月17日(金) 12:00~16:40 (会場:屋島西小学校)		第4回 11月28日(火) 12:45~16:45 (会場:教育センター)	
時間	内 容	時間	内 容
12:00	受付	12:45	受付
	研修「実践発表校から学ぶ」 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;"> 第3回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会中・四国ブロック大会 (香小研生活部会研究発表会) 高松市立屋島西小学校 研究発表会 </div>	13:00	研修「教育講演から学ぶ」 (県教育センター教育講演)
12:20	開会行事・全体会		講演 「『人間力』を育む総合的な学習の充実化のための具体的戦略を探る」
13:20	公開授業 総合的な学習の時間 「西っ子生き生き学習」		講師 鳴門教育大学 村川雅弘 教授
14:50	移動		
15:00	講演 演題 「新・学習指導要領改訂の姿～生活科・総合的な学習の本質を問う～」 講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 国立教育施策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 田村 学 先生	16:00	研修のまとめ アンケートの実施 研修レポート作成について
16:40	閉会	16:45	閉会

第1回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成19年10月27日(金) 13:00~16:30

高松商工会議所会館 大ホール

講座の内容

- 1 講 話 総合的な学習の時間の現状と課題
香川県教育委員会事務局義務教育課 担当
- 2 講話・演習 総合的な学習の時間のコーディネーター
香川大学教育学部附属教育実践総合センター 助教授 田上 哲氏

総合的な学習の時間の現状と課題

中央教育審議会の答申、審議経過報告から

「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」(平成17年10月26日 中央教育審議会)

総合的な学習の時間については、大きな成果を上げている学校がある一方で、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。

また、義務教育に関する意識調査の結果によると、総合的な学習の時間については、全体としては評価は高いが、小学校中学校とでは教師、保護者、子どもの意識や評価に差があることが明らかになった。

思考力、表現力、知的好奇心などを育成する上で総合的な学習の時間の役割は今後とも重要であるが、同時に、授業時数や具体的な在り方については、各教科との関係を明確化するなど改善を図ることが適当である。その際、全国的に一律に定めるのか、学校の裁量による弾力的な取扱いができるようにするのかなどを考慮する必要がある。

また、学習が効果的に行われるよう、学校に対する支援策を充実させることが必要である。さらに、総合的な学習の時間の充実のためには、学校外の人材の協力や地域との連携が重要である。

(第1章(2)教育内容の改善 イ学習指導要領の見直し)より抜粋 (下線部後付)

「審議経過報告」(平成18年2月13日 中教審 初等中等教育分科会 教育課程部会)

総合的な学習の時間については、各学校において、例えば、
国際理解、情報、環境、福祉・健康等の教科横断的な学習
子どもによる課題設定と調査研究、作品製作、学習成果の発表会等の学習
自然体験、職場体験、奉仕体験等の学習

などが行われている。

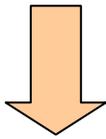
上記 については、国際理解、情報、環境、福祉・健康など特定の領域の教育について、関連する教科の内容との関係を整理する必要がある。

上記 については、子どもの主体性をはぐくむ上で重要な学習であるが、中学校の選択教科の学習との重なりを指摘する意見があるので、両者の関係を整理し、検討することが必要である。

上記 については、子どもの個性を伸ばし、主体性や自立性を高め、目標に挑戦する力を育てていく上で重要な役割を果たすものである。特に、学習面では、課題探究型の学習と結び付くことで、学習意欲の向上にも資するものと考えられる。

その一方、特別活動との関係を整理することが必要である。

(2教育内容等の改善の方向(1)人間力の向上を図る教育内容の改善 具体的な教育内容の改善の方向(3)総合的な学習の時間などの改善 支援策)より抜粋 (下線部後付)



総合的な学習の時間の趣旨やねらいに照らして、学校の取組を検証し、その結果を踏まえて今後の取組の改善を
= 総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメントを

教育課程や学習指導の改善・充実のための課題例

(平成18年度小中学校教科等担当指導主事連絡協議会資料)から

総則(小中共通)

総合的な学習の時間の趣旨やねらいの実現のための取組の工夫改善

育てようとする資質・能力や各教科等との関連の明確化、学年間の系統性や小・中学校を見通した指導計画の策定、学校として組織的・計画的に取り組む体制の構築、児童生徒一人一人の学習が成り立つ指導の工夫改善、学習状況の適切な評価のための工夫、外部人材との連携協力体制の構築などに配慮する必要がある。

(下線及び番号は後付)



総合的な学習の時間の推進のために 「初等教育資料 平成18年5月号、7月号」から

総合的な学習の時間と「習得型、探究型の教育」

ア 習得型の教育 = 基礎的・基本的な知識・技能の育成

義務教育段階で「総合的な学習の時間」において重視したい力

- ・ 体験から感じ取ったことを表現する力
- ・ 知識・技能を実生活で活用する力
- ・ 情報を獲得し、思考し、表現する力
- ・ 構想を立て、実践し、評価・改善する力



知識・技能の活用

イ 探究型の教育 = 自ら学び自ら考える力の育成

- ・ 子どもの好奇心を刺激し、学ぶ意欲を高めたり、知識・技能を体験的に理解させる上で重要なことであり、自ら学び自ら考える力を高めるため、積極的に推進する必要がある。

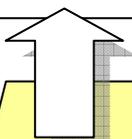
習得 活用 - 探究の流れの中で

総合的な学習の時間における読解力育成

具体的な体験活動を行う

- ・ 具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころとし、感じたり考えたりしながらさまざまな情報を獲得するために、具体的な体験活動を単元に位置付ける体験を振り返り、そこから情報を取り出す
- ・ 自らの体験を振り返る学習活動を設定したり、意図的な情報提供を行ったりし、体験を対象化し、体験を通して得られる情報を意識するようにする。
収集した情報の分析や考察を行う
- ・ 収集された情報は、比較、類型、序列などの学習活動を行うことで分析され、子ども一人一人にとって価値ある情報となるようにする。
分析と考察から一般化や概念化を図り、生活に生かす
- ・ 分析した情報を自分自身や実際の体験とのかかわりで一般化や概念化を行うことで、生活に生かすことにつなげていくようにする。

から の学習プロセスを意識した学習活動の展開を



総合的な学習の時間コーディネーターの育成

総合的な学習の時間の総合的な企画調整を担う

「総合的な学習の時間」のコーディネーター

講師 香川大学教育学部附属教育実践総合センター 助教授 田上 哲 氏

講話 「よりよいコーディネートのために」を聞いて

総合的な学習の時間に学校として組織的に取り組むための企画・調整をどのように担うか。また、よりよいコーディネートのための留意点などについて講話をいただいた。

ここでは、その講話内容やその感想をまとめた報告書を紹介する。

よりよいコーディネートのために

- (1) 総合的な学習の時間についての理解を深める。
 - ・ 総合的な学習の時間の目標や内容、指導方法や評価の工夫、各教科等との関連等を明確にした全体計画や年間指導計画を作成するとともに、校内研修等を通して実践を深めることが大切である。
- (2) 指導体制や研修体制を整える。
 - ・ 総合的な学習は、様々な児童の興味・関心や学習スタイル等の違いに対応していかなければならない。また、学習内容の検討や教材開発も学年団を中心に各学校で進めていかなければならない。これらのことに、一人の教師で対応するのは難しい。複数の教師が、自分の得意分野を生かしながら、総合的な学習を創り上げていくことが大切である。
- (3) 子どもの主体的な学びを保障する。
 - ・ 子どもに「生きる力」の育成を求める総合的な学習は、子どもに主体的な学びを保障するものでなければならない。そのためには、まず、教師の主体性が求められる。学校（教師）自身が楽しみと充実感をもって、主体的にカリキュラムを編成して取り組むことが大切である。
- (4) 地域や関係機関との連携を図る。
 - ・ 子どもの興味・関心や地域に教材を求めた学習をするとき、指導者には幅広い（時には専門的な）知識や技能が必要となる。このことに対応するためには、子どもの興味・関心に応え、子どもの主体的な学びを保障するという観点に立って、地域や関係機関に広く人材を求めていくことが大切である。

教師の協働体制を構築するために

- (1) 教師間のよりよい人間関係を築く。
 - ・ 教師が主体性と充実感をもって総合的な学習に取り組むために、教師が今まで以上に互いによく理解し合い、温かい人間関係を築いていくことが大切である。
- (2) カリキュラムの評価と改善を実施する。
 - ・ 総合的な学習がより良いものになっているという実感もてるように、年度末にあわてて評価するのではなく、年度の途中で何回か評価を加え修正することが大切である。

（丸亀市：小）

研修（講話）から学んだこと

総合的な学習の時間がねらい通りの成果を上げているとは言い難い要因の一つとして、教員の意識の差の問題が大きいと感じた。総合的な学習の時間が充実したものになるために、コーディネーターの果たす役割の重要性を学んだ。

《コーディネーターとしての役割》

- ・ 組織としてどのような協力体制をとれば総合的な学習がうまく進んでいけるかについての企画・調整を担う。
- ・ いかにして同僚や地域に対して総合的な学習の時間への理解を深めていくか。
- ・ 理解を得るための教員研修を現職教育の中に取り入れていくことが必要である。
- ・ 総合的な学習の時間における今日的な課題の解決や資質の向上（読解力の育成等）を盛り込んでいく。
- ・ 優れた先進事例の情報をつかみ、教員に紹介していく。
- ・ 先生方一人一人が主体的に動けるようにするための、環境整備や調整を行う。
- ・ 取り扱う内容・方法について熟知していくこと。
- ・ 同僚一人一人をよく理解していくこと。
- ・ 自校の総合的な学習の時間のよいところと改善すべきところについて、コーディネーターの視点から検証する。
- ・ 各学年で行った総合的な学習の内容についてパッケージ化などをして、次の学年に送れるよう調整する。

《コーディネーターとしての留意点》

- ・ コーディネーターが全面的にリーダーシップをとるのではなく、先生方が主体的に動けるように支援し、いかに表舞台から身を引いていけるかという視点から考えていくこと。
- ・ 外部からの人材については、本当に子どものためなのか、業者の利益の助けにならないか等、常にフィルターをかけておくこと。

（高松市：小）

コーディネータの役割認識

講義の中で、総合的な学習の時間を学校として組織的に取り組むための最大の課題は教師の意識であるとの指摘があった。

また、教師が自発的に動ける組織や環境、カリキュラム作りを支援・調整することがコーディネータの役割であり、「黒衣」のような存在になるのが理想であるとも指摘した。ぜひ、実現したいと考えている。

（東かがわ市：中）

コーディネーターとしての留意点

- ・ いかに表舞台から身を引いていけるか。

先生方一人一人がいかに主体的に動けるようにしていくか、動きのコーディネートを

- ・ 取り扱う内容・方法について熟知していくこと
- ・ 同僚一人一人をよく理解していくこと
- ・ うまくいかないことも多いが、最も基盤となるのは学校の雰囲気づくり
互いへの温かな関心をいかに醸成していけるか。そのための工夫を

（坂出市：小）

「総合的な学習の時間」のコーディネーター

- (1) 「総合的な学習の時間」に学校として組織的に取り組むための企画・調整を担う
- (2) ヒトの問題（環境を構成するヒト）をコーディネートする
 - ・ 子どもの主体的な学びを最優先に！
 - ・ 教師の主体性（個々の教師のコンディション）に配慮・・・充実感を
 - ・ カリキュラム・マネジメント
 - ・ 技術合理性だけでなく社会合理性を重視したカリキュラムを
 - ・ 総合的な学習の時間は、学校に裁量権、権限を与えたもの。教師の創意・工夫で、主体的にカリキュラムを組める。
 - ・ 教師が主体的でないと、子どもの主体性は育たない。
 - ・ 先進的な学校のまねをしてもだめ。環境、教師、子ども、地域が違うから。それに、教師のカリキュラム開発力が育たない。
 - ・ カリキュラムをデザインすること。スムーズに動くように合理性を追求する。
 - ・ 「子どもの主体的な学び」を成立させるためにという視点を第一に。
- (3) モノ・コトの問題をコーディネートする

よりよいコーディネートのために

- (1) 総合的な学習の時間への理解を深める
 - ・ P (P l a n)
 - ・ 目標、全体計画、指導計画、体制・組織・研修、学習環境、地域・学外との連携
「体制・組織・研修」は持ち方が大切。「連携」は、本当に役立つものを。
 - ・ D (D o) C (C h e c k) A (A c t i o n)
 - ・ 教材（学習材）の開発、指導方法・指導評価の工夫、カリキュラムの評価と改善。
 - ・ 評価・改善は、年度末では遅い。来年度すぐに始められるように、計画的に行う。
- (2) 同僚・地域への理解を深める
 - ・ 地域の人材を活用する場合は、本当に子どもの主体的な学びにつながるのかを検討

コーディネーターとしての留意点

- (1) いかに表舞台から身を引いていけるか。
先生方一人一人がいかに主体的に動けるようにしていくか
- (2) 取り扱う内容・方法について熟知していること
- (3) 同僚一人ひとりを（お互いに）よく理解していくことー学級作り・授業と同じー
- (4) うまくいかないことも多い
- (5) 互いへの温かな関心をいかにして醸成していけるか・そのための工夫を
(綾川町：小)

心に残った講義指導内容

「いかに協力関係を保ちながら研修を進めていくかがポイントである。」ということや「先生方が主体的に動けるような組織づくりをしていくことがコーディネーターの仕事である。」という指導内容が心に残った。

総合的な学習が成果を上げるためには、「教師の意識の問題」、つまり、「人の問題」を考えていかなければならない。それも、コーディネーターが一人で力むのではなく、総合的な学習の魅力は伝えるが、教師集団が主体的に動ける雰囲気づくりが重要であると痛感した。
(綾川町：小)

自校の「総合的な学習の時間」を コーディネートの視点から検証する

自校の総合的な学習の時間のよいところや改善すべきところを振り返り、その要因の分析する研修を、ワークショップ型による方法で実施した。

ここでは、研修方法やその研修の様子、研修を受けての感想を紹介する。

ワークショップによる研修方法

- 1 グループ編成
1グループ4～5人で。今回は、中学校区で1中学校と3～4小学校でグループを編成した。
- 2 各自が、自校の「総合的な学習の時間」のポジティブ（よいところ）とその理由を書き出す。（ブレインストーミング法）（青付箋紙に）
- 3 各自が、自校の「総合的な学習の時間」のネガティブ（改善を要するところ）とその理由を書き出す。（ブレインストーミング）（黄付箋紙に）
- 4 グループ全体で、話し合う
書き出したそれぞれの付箋紙を持ち寄り、意見交換をしながら付箋紙を分類する。
- 5 分類したものにタイトルを付れたり、関係を矢印で結んだりする。
- 6 最後にそれらから分かったことを文章でまとめたり、発表したりし、互いの取組の意見交換により新しい視点などを見つける。



ワークショップに取り組む先生方

KJ法を使って意見を分類する

あるグループのワークショップ結果

ポジティブな側面として

地域の実態に即している

- ・地域の自然、環境が学習のベースに合っている
- ・地域素材が中心になっているために、地域の教育力、地域の連携が効果的にできている。
- ・地域の人材を生かしているような活動にゲストティチャー的に入っている。
- ・地域に施設や埋蔵文化センターがあり、歴史を学ぶのにはいいところである。また、福祉施設もあり、様々な交流ができる。

資料やワーク資料のパッケージ化

- ・使用する資料やワークシートのストックができています。

多様な活動の工夫

- ・多様な体験活動が工夫されている

年間計画の工夫

- ・平成17年度より年間計画上でまとめ取り(週3時間を決めていない)をしているため、集中した時期に活動ができています。1日中総合が続くことも可能。
- ・英語活動を毎日10分間日課の中に位置づけ、年間35時間を確保している。
- ・「生き方」をテーマに3年間見通した年間計画ができています。
- ・内容が中学校3年間通して大きく3つに分かれている。(行事総合、学年オリジナル総合、人権総合)

ネガティブな側面として

評価が不明確

- ・活動の評価(振り返り)の観点がより具体的でない。
- ・評価規準が明らかでない。
- ・評価の不明確さ

他教科との関連不足

- ・他の教科との関連が十分に図れていない。
- ・各教科との関連が明確にされていない。
- ・人権旬間を学年ごとに総合の中に位置づけたので、全校としての人権意識の高まりが消えた。

外部との連携

- ・外部人材との連携がうまくとれない
- ・予算を始めいろいろな制約が多い。
- ・ゲストティチャーの活用が今ひとつである

小中の連携ができていない

- ・小学校との連携ができていない
- ・小学校との連絡調整ができていない。(特に1年の地域学習に関しては)

学校としての内容が定着してマンネリ化

- ・教員の積極的な取組が感じられない。
- ・教師主導型で子どもの関心意欲が十分に生かされていないところがある。
- ・毎年同じような活動がなされマンネリ化している。
- ・4年間で子どもが身につけられる力の見通しが不十分である。
- ・明確な課題を持っていないので、課題解決プロセスがあやふやで自ら探ることから「生きる力」を育てるには至っていない。

学年間の系統性

- ・学年間の系統性が見られない
- ・各学年間の活動の系統性が見られない
- ・学年の独自性任せられているといえはいいが、計画通りにいっていない。
- ・身につけさせたい力を掲げているが、その目標が学年をふまえて系統だっているかの見直しが不十分

その他のグループから出てきた主な分類タイトル

- ・カリキュラムの整備
- ・教科等との関連
- ・少人数の利点
- ・子どもの実態
- ・教師の意識
- ・教師の負担
- ・評価
- ・予算
- ・地域とのかかわり
- ・保護者の理解
- ・時間不足
- ・自然文化
- ・体験活動

ワークショップをして

ワークショップで、他校の様子を知り、自校のよさを再確認したり、関係する中学校との連携から自校の改善点を発見したりし、自校の課題が明確にすることができた。ここでは、ワークショップによる研修についての報告書を紹介する。

自校の総合的な学習の時間を検証する

促進要因と阻害要因について考え、自校の総合的な学習の内容と、教師の取り組み方についてコーディネートの視点から検証した。

検証して見つけた良い点は3つ。

本校の総合的な学習のテーマは学年の発達段階にあっており、魅力ある内容になっている。

地域性を生かし、「人から学ぶ」学習ができています。それは、各学年の先生方が常に新しい感覚で地域を見て、人とのつながりをコーディネートしているからである。

各先生方が、主体的に総合的な学習に取り組んでいる。

改善点は1つ。本校の教育計画の総合的な学習の項に、ねらいと、各学年の評価項目が記載されていないことに気付いた。いずれも、作成されているものなので、教育計画の中にも入れたい。

中学校は、基礎学力を付けることが、生徒・親・教師の願いである。1年生は早明浦ダムへ、2年生は五色台へ行かなければならない等外部からの制約があること。それらが総合的な学習を進める上での阻害要因になっていることがわかった。

(高松市：小)

自校の「総合的な学習の時間」を検証して

香川大学の田上哲先生のご指導のもと、自校の「総合的な学習の時間」を検証することになり、いろいろなことに気付かされた。「総合的な学習の時間」の取組について、十分な実態把握ができていないことが、反省の第一である。したがって、促進要因と阻害要因を整理することが大変難しかった。

この機会に、時間をかけ改めて「総合的な学習の時間」を検証しなければならない。そして、本校の「総合的な学習の時間」の課題を明確にすることが、コーディネーターの第一歩であると思う。

また、他校の先生方と各校の促進要因と阻害要因を出し合い、整理する活動を行ったが、それぞれの学校の取り組みのようすについて知ることができた。今回、詫間中学校区で1つのグループを作った研修であったため、具体的な話し合いになった。まだ、1回目でもあり、十分な情報交換にはならなかったが、今後の研修の中で、小学校同士の連携、小中の連携に向けての具体的な話し合いのできる場があればよいと思う。

(三豊市：小)

第2回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成19年11月7日(火) 13:00~16:30

県民ホール 北館4階大会議室

講座の内容

- 1 講 話 総合的な学習の時間コーディネーターについて考える
実践事例によるカリキュラム改善の紹介(ビデオ視聴)
- 2 演 習 ・自校の総合的な学習の時間の見直し(ワークショップ)
・コーディネーターの視点に立った自校の特色を生かした総合的な学習
の時間の改善・改善策の交流(ワークショップ)
- 3 講 話 コーディネーターの視点から見る授業参観のポイント

講師 香川大学教育学部附属教育実践総合センター 助教授 田上 哲 氏

総合的な学習の時間コーディネーターについて考える

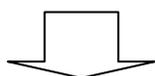
第1回の講座で明らかになった総合的な学習の時間の課題をもとに、コーディネーターとしてどのようなことができるのか、どのようなことに気を付ければよいのかということについて、先進的な取組をしている学校のビデオ視聴などを通して講話をいただいた。

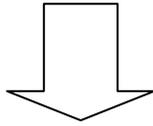
ここでは、コーディネーターの役割についての講話をまとめた報告書を紹介する。

第1回の養成講座のワークシートから 各学校から出された問題点・・・

養成講座参加者のつぶやきをまとめると

- ・教育計画の中に総合のめあてがなかった。
- ・目標が不明瞭なため評価もすることができない。
- ・前年度の教材を使うことが至上命令だったり、使ってはだめだったりするなど、非常にやりにくい現状がある。(人間関係)
- ・総合学習の担当者が積極的でないとき省エネ学習になることがある。
- ・やればやるほど他教科との時間調整が難しくなってくる。
- ・内容が多すぎて、やりにくい場合がある。
- ・発展させる内容の学習展開になっているが、そのために多くの時間を使うのはどうであろうか。
- ・教科との関わりを考えたことがないため、評価もしにくい。
- ・総合の時間がテスト前の遅れの時間として活用していることがあった。
- ・自信がないとき、他の先生方のやっていることをチラ見しながらしているのが現状である。
(高松市：小)





総合的な学習の時間コーディネーターとして
どのようなことができるのか。
どのようなことに気を付ければよいのか。

田上先生配付資料の項目から



総合的な学習の時間コーディネーターについて考える

- ・ 校務としての位置付けは？
- ・ 目的としての総合的な学習の時間の改善
共通理解 協働体制 【P-D-C-A】
- ・ 校内での交流 学校を超えた交流の必要性
でも、交流が目的ではない
- ・ 学校全体のカリキュラム改善 = 学校改善に直結
学校全体を巻き込んで、総合的な学習の時間を
子どももの教師のものにしていく
- ・ 自他のコンディションへの留意

講話の要旨

総合的な学習の時間コーディネーターについて考える

- (1) 校務としての位置付け
 - ・ 総合的な学習の時間コーディネーターは、特別支援教育コーディネーターとは違って、校務上明確に位置付けられていない。総合的な学習の時間を学校現場に根付かせる上からも位置付けを考える必要があるのではないだろうか。
- (2) 目的としての総合的な学習の時間の改善
 - ・ 総合的な学習の時間のメリットを認め、総合に対する意識として「何をするか」「何ができるか」ということについての共通理解を図り、協働体制を整えること。
 - ・ 総合的な学習の時間で子どもたちがよりよく育つことを目的とすること。
 - ・ 「P D C A」のマネジメントサイクルは実践をしながら動かすことが大切である。
- (3) 学校内での交流 学校を超えた交流の必要性
 - ・ 校内の「温かい関心」をベースに、「互いがものを申す関係」を構築することが大切である。
 - ・ 小・中の関係では、地域教材の深め方、小中の関連のさせ方などを話し合うというように、学校を超えた交流が必要である。
- (4) 学校全体のカリキュラム改善 = 学校改善に直結
 - ・ 学校全体を巻き込んで、総合的な学習の時間を子どももの、教師のものにしていく。
 - ・ 総合的な学習の時間を、教科の枠を超えて何かができる、追究できる時間と捉え、学校教育改善に結びつけて欲しい。
- (5) 自他のコンディションへの留意
 - ・ 教師として、ベストのコンディションで子どもの前に立つことができるようにするとともに、自他のコンディションへの拝領や留意が必要である。

コーディネーターの役割について

生徒が学びの主人公になる総合的な学習の時間を作り上げる。キーワードは、「職員の温かい関心と共通理解である」という言葉が印象に残った。

コーディネーターの役割と考えられること。

- ・ 校区内の小学校での総合の時間の内容を把握して、まとめる。
- ・ 総合の時間の計画の基本を子どもたちがよりよく育っていくことを目的にした柱をくずさない。そのために時々、目的を振り返る機会をもつ。
- ・ 年度末に3年間を見通した柱を学年主任と管理職、総合の時間担当、教務主任で決める日時とメンバーを提案する。
- ・ 総合の時間の目的の柱から生徒の心と体の成長に応じた無理のないスッキリしたものにする。総合の時間の使い方を各学年で相談できる場を提案する。出てきた内容の情報を全職員に知らせて、調整や検討の時間を設ける。
- ・ 総合的な学習の時間が職員の話題になるように、常に総合の時間の情報を全職員に流す。
- ・ 互いに情報交換をし、あたたかい協力体制ができる職員の環境づくりを心がけ管理職に支援をお願いする。
- ・ 学年主任や総合の時間担当に負担がかかりすぎないように、バランスの調整の支援をする。

(三豊市：中)

総合的な学習の時間コーディネーターの役割について

総合的な学習の時間のコーディネーターは特別支援教育コーディネーターのように位置づけられていないが、今までは現職教育のテーマとして取り上げることにより、総合への取り組みについて研究する方向が取られていた。

コーディネーターとしての役割(総合的な学習の目標設定、育てたい力の分析、学年の系統性の素案づくり等)を現教主任が担っていた。また、具体的な教材開発や地域人材の発掘は学年団が行っていた。全職員の共通理解のもとで、学年団を母体として協働体制を整え取り組むことにより、より充実した総合的な学習への取り組みを行うことができる。

コーディネーターとは、

- ・ 総合的な学習を円滑に進めていくための組織づくり
- ・ 評価の場の提供(目標・育てたい力・学習内容・体験・学習評価の方法等)
- ・ 改善策の整理

などが主な役割ではないかと考える。

総合的な学習の時間が創設された意義をもう一度振り返り、充実した取り組みが行われるようにコーディネーターとしての立場を理解し、その役割を果たしていかなければならない。

教科の学習には学年ごとのねらいが指導要領に示されているが、総合的な学習は各学校に目標等の設定が任されている。より充実した時間にするために、コーディネーターがいろいろな面(職員全体・学年団・保護者・地域)に積極的に働きかけていくことが重要となる。

(高松市：小)

ビデオを資料 大東学園高等学校（東京都世田谷区）の
「総合」によるカリキュラム改善

東京・世田谷の大東学園高等学校（普通科共学）は普通・福祉の2コースを設置。少人数授業や総合学習を導入し、生徒・保護者・教職員の三者が協力・協働私学園づくりを進めている。

ここでは、総合的な学習の時間の持つよさを感じて欲しいため、本校の総合的な学習の時間の様子をビデオ視聴した感想を紹介する。

総合的な学習の時間で
子どもが変わる 教師が変わる そして学校が変わる

ビデオ資料：大東学園高等学校の「総合」によるカリキュラム改善

どんなに素晴らしい学校の実践かと思って視聴し始めてすぐ、この学校の生徒の服装や態度を見て驚いた。女子生徒が立て膝付いて椅子に腰掛け授業を受けている、櫛で髪をといている、メールをしているなど……。かつて授業が普通に成り立たない学校だったらしい。そんな大東学園は、総合的な学習の時間が切り口となって、教材開発・指導方法の改善など教師間で情報交換に努め、生徒と真剣に向き合う授業へと授業改革していった。そして、身の回りの問題について真剣に考えようとする生徒が増え学校が変わっていった。どの教科の授業ももちろん切り口となり得たかもしれない。しかし、能力面に差を生みやすい教科より、生きる力を育てることに究極のねらいがあると言える総合的な学習の時間こそ、様々な問題を抱えた現在の学校や児童生徒にしっかりと向き合う生きた授業となるのではないか。世間一般の評価が高いとも思われぬ総合的な学習の時間が、今、なぜ改めて見直されようとしているのか分かったように思う。（丸亀市：小）

「大東学園高等学校の総合学習の実践」ビデオから

生徒の発言

「会って話を聞くまでは、あまり興味を持っていなかったが、人に会って話を聞くと、相手から光線が飛んでくるようで、引き込まれた。人の気持ちを分かろうとする努力をするようになった。」

実際に人に会い、話を聞く体験を通して、自分から考えたり、自分の言葉で学んだことを表現したりする力をつけている。

教師側も教材選択や指導のあり方について、学年団会を開き、共通理解・協働体制のもと進めている。教師側の姿勢も変わってきた。教科指導では、押しつけの授業になりがちだが、総合学習では、一緒に考えることができ、生徒の発言もたくさん引き出すことができる。総合学習を取り入れることで、主体性が育っている。（さぬき市：小）

先進的な実践から学ぶ：大東学園高等学部の「総合」によるカリキュラム改善

VTR視聴をして、次のことを学んだ。この高校は、全国に先駆けて「学校5日制・総合的な学習」を導入した。その際の課題は「先生も生徒も授業を苦痛に感じていた」であった。毎日の授業（教科）を変えるのは難しい、「総合」の実践を起点として生徒の意識・教師の意識を変えていこうとする姿は非常に印象的であった。特に「総合」授業で意見を戦わす友達から「光線が飛んでくるように感じる」「人の気持ちを分かろうとするようになった」と感想を述べている姿に感動した。（丸亀市：中）

- 1 自校の総合的な学習の時間の見直し
- 2 コーディネーターの視点に立った自校の特色を生かした総合的な学習の時間の改善・改善策の交流

ワークショップによる研修方法

- 1 グループ編成
 - ・ 1グループ4～5人で。
- 2 準備物
 - 第1回のワークショップで記述したワークシートや自校の取組の様子を示す資料を持参する。
- 3 作業内容・方法（グループで 一人あたり10分程度）
 - (1)発表
 - ・ ポジティブな面を支えている要因で伝えたいことを発表する。
 - ・ ネガティブな面で生じてしまう要因で伝えたいことを発表する。
 - (2)質疑応答
 - (3)コメント書き
 - ・ お互いに発表を聞き、改善点についてアドバイスを付箋紙に記入し交換する。
- 4 全体発表
 - ・ グループ内で話し合われたことを報告する。発表を聞き、自校の改善の参考にする。
- 5 改善策の交流
 - ・ 発表を聞き、コーディネーターとして自校の改善策を3つ程度書き出す



発表

自校の取組をポジティブな面、ネガティブな面から資料を用いながら5分程度発表する。

コメント記入、添付

よい点、改善点について意見文を書く。発表者は、もらった意見文をワークシートに貼る。



ワークショップをして

第2回講座のワークショップは、自校のポジティブな面、ネガティブな面に対し、他校から意見をいただき、自校の改善点を見つけ出すものであった。このワークショップは、自校の再発見とともに、コーディネーターとしての役割の自覚につながるものであった。

ここでは、ワークショップの事例をまとめた報告書を紹介する。

ワークショップで

研修の中で、グループの先生方と自校の課題について話し合い、アドバイスをもらったことは私にとって、大変有意義だった。まず一つに、みんなよく似た苦勞をしているのだと言うことがよく分かった。特に小学校では、年間計画がしっかりしているほどマンネリになりやすい。活動に追われてしまい、子どもが身に付けるべき力を付けられているかどうかの評価活動が十分にできない。時間が足りない。いろいろな学校課題があって、盛りだくさんになりすぎる。などであった。いろいろな学校の課題を解決するための取り組みは少しずつ違うのだが、今回はそこまで話を聞くことができなかつたのが残念だ。講座修了までにぜひ聞いてみたいと思う。

自分が出した問題点だけでなく参考になった取り組みやもらったアドバイスをまとめてみる。

地域の教材を活用しきれない

まず地域教材を洗い出す。そして学校全体で子どもの発達段階や課題に合う素材について共通理解を図り、精選して配列する。

マンネリ化してしまう

担任に任される所が多いのが総合的な学習の時間の良いところだが、学校全体でどのような子どもを育てたいのかを十分に共通理解した上で、今年はどうのようにしていきたいのかを年度初めに、そして実際はどうであったかを年度末に話し合う必要がある。担任している学年だけでなく、学校全体の取り組みを十分に理解した上での担任裁量でないと、前年度のままであるためのマンネリ化を招いたり、十分な引き継ぎが行われないなどといったことが起こってしまう。共通理解と創意工夫の両方が大切。この話し合う場を設定するのもコーディネーターの役割。

評価規準の活用

期末評価は記述で行うので、活動の様子を丁寧に記録していくと、子どもの姿が浮き彫りとなり、変容がよく分かる。活動だけに目を奪われずに評価する時間を上手くもてるようにしたい。

まずは学校内での交流

計画を提出するだけで、各担任の思いや工夫について話し合う場がなかったことに気が付く。地域の人とのつながりを大切にすると同じように校内での教職員の総合的な学習を通してのつながりを大切にしていきたい。

(土庄町：小)

演習 自校の総合的な学習の時間の見直し

本校の取り組みには以下のようなコメントが寄せられ、カリキュラムの改善策を検討した。

4年間を見通した大きなテーマ（地域の建造物や自然、湊川を中心とした自然環境と郷土料理、地域のボランティア活動と郷土芸能、地域の歴史と未来への展望）を設定し、具体的な活動内容については学年団で相談して決定するというシステムについて

児童や担任の願いを取り入れやすく、カリキュラムのマンネリ化が防止できる。（多数意見）

最低限身に付けさせたい力を確実に保障するには、固定的な計画も必要。（少数意見）

国語科や社会科とつないで学習活動を展開していることについて

表現力や調べ学習を進める力の向上が期待できる。（多数意見）

他教科の補習的な扱いにならないか心配である。（少数意見）

調べ学習やレポートの作成の際、積極的にコンピュータを活用していることについて

情報機器の活用能力が高まり、自分の思いの「発信」を通して表現力も向上する。



カリキュラム改善の基本的な構想

主要教材と見学（体験）場所、外部講師、他教科との関連を明確に示す。

他教科とつないで育てたい力を系統的に分析し、活動計画に明示する。

児童の関心や希望を活動計画にどう反映するか、さらに検討を進める。

（東かがわ市：小）

ワークショップから

前回、各学校から出された問題点を田上先生が整理してくださった。では、それをどのように改善していくかという話し合いを第2回ではグループに分かれてしました。私のグループは、小学校6校中学校3校の計9校でした。ここで各校の実態を聞きながら、地域の特質をうまく利用したり、きちんと研修体制を確立していたり、体験を中心に据え学習材の開発をしたり、小中の連携を日頃からとっていたり、どの学校も工夫されているなあと感じました。

また、みなさんから本校の実態に対する改善策のアイデアもいくつかいただきました。その中から自分なりに考えた3つの改善策が以下の通りです。（優先順位順に）

1. ポートフォリオの構築をする。
2. 年間指導計画に変更点と反省を書きこむ。
3. 総合担当が中心となって組織を立ち上げ、活動を開始する。

出来そうな点から取り組みたいと思います。

（高松市：小）

コーディネーターの視点から見る授業参観のポイント

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座は、「実践発表校から学ぶ」として、高松市立屋島西小学校で開催された「第3回全国小学校生活科・総合的な学習教育協議会 中・四国ブロック大会」に参加し、公開授業、研究発表、講演等から研修をすることとした。

そこで、「コーディネーターの視点から見る授業参観のポイント」として、参観の留意点について指導を受けることとした。

ここでは、その指導内容についての報告書を紹介する。

授業参観のポイントは

コーディネーターの視点に立った公開授業参観のポイント

- ・ 「カリキュラム（単元計画・指導案）評価 授業評価 学習評価」から、「学習評価 授業評価 カリキュラム評価」へと流れがうまく機能しているか。
- ・ 自分の生き方にかえる，自分がある学びが成立するといった，学習者の学びのための条件があるか。
- ・ 授業のための条件づくりがうまくいったかどうか，組織の中で授業経営的視点で考えられているか。
- ・ 教育課程のための条件づくりがうまくいったか，教育課程経営的視点で考えられているか。

（高松市：小）

コーディネーターの視点に立った公開授業参観のポイント

カリキュラム（単元計画・指導案）評価 授業評価 学習評価から
学習評価 授業評価 カリキュラム評価へ

「子どもが学んでいる」そういうカリキュラムになっているか。

学習者の学びのための条件作りはうまくいったか。教師主導型になってはいないか。子どもの学びから出発しているか。

授業のための条件作りはうまくいったか。子どもの学びの支えになるものは？

教育課程のための条件作りはうまくいったか。

今回の屋島西小学校での研究授業参観の視点が明確になった。

（観音寺市：小）

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

実践発表会から学ぶ

平成18年11月17日(金) 12:00~16:40
高松市立屋島西小学校

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座は、高松市立屋島西小学校で開催した「第3回全国小学校生活科・総合的な学習研究協議会 中・四国ブロック大会」に参加し、総合的な学習の時間への取組の様子を学ぶこととした。

【研修日程】

12:20 開会行事 全体会(全体提案)
13:00 移動
13:20 研究主題を授業で提案
幼・小連携交流 総合的な学習
14:50 移動
15:00 講師に聴く
16:30 閉会

「研究発表」から学ぶ

《屋島西小 研究主題》

地域に根ざす学校づくり ~自然 生命 文化・伝統を育てていく~

研究の視点 地域教育プラン 振り返り学習 幼・小のなめらかな接続

全体提案、研究発表会資料から

<視点1「地域教育プラン」より>

「地域教育プラン」とは、地域社会・地域住民が願う地域教育目標と学校が目指す教育目標との共通の目標を持ち、互いに協働しながら教育づくりをするものだと思ったが、そうすると、地域も学校も共に子どもを育てようという意識で、互いに教育力を充実させることができるので、大変よいことだと思った。

<視点2「振り返り学習」より>

従前の「振り返り」に比べ、提案された「振り返り学習」は、子どもが体験後、表したり考えたりした内容を、さらに深めるために、最初の体験活動の振り返り後、もう一度体験活動を組むようにしているので、子どもが自分の活動を価値付けたり、自分の伸びを自覚したりしやすくなる感じた。すべての活動で、というわけにはいかないが、体験活動の種類により、できそうなところで取り入れてみたい。

<視点3「幼・小一貫の発達の連続性に立つ連携交流」より>

幼稚園から小学校への滑らかな接続を意識して、一貫したカリキュラムを作成し、チーム保育等を行っているそうだが、その授業実践を見せていただいて、共に活動しながらも、幼稚園は幼稚園の学びを、小学校は小学校の学びをしていることが分かった。また、幼稚園児の表情を見ていると、このような活動を年間を通じて行っていたら「小1プロブレム」の心配はないのだろうなとほほえましく思った。

(琴平町：小)

「提案授業」から学ぶ

第4学年 西っ子いきいき学習

単元名 「体験！発見！米作りの技 ～ワラを生かした日本の文化を探ろう～」

単元目標

- (1) 収穫後のワラの活用方法を調べたり、ワラ体験をしたりしてワラが生活の中で生かされてきたことを知り、自分たちの生活の中にもワラの特性を生かしたものを創り出そうとすることができる。
- (2) ワラのすばらしさを調べたり、ワラ体験したりして分かったことを相手に分かりやすく伝え合いながらまとめることができる。
- (3) ワラは古来からその特性を生かしてあらゆる生活の場で活用されてきたことが分かり、くらしを豊かにするための日本人の知恵や工夫、技術や創造性を知ることができる。



本時の目標（8 / 10時間）

- ・ ワラの作品づくりを通して生まれたワラのよさについての疑問をコーディネーターに質問することで解決を図り、「よさカード」に付け加えたり、修正したりすることができる。

本時の学習活動

- 1 ワラで作った作品を紹介し、家の中に飾る。
作品の紹介
- 2 「よさカード」を付けて家の中に作品を置く。
- 3 よさのことで、もっと聞きたいこと、疑問に思うことを聞く。
コーディネーターとのやりとり
- 4 ワラの作品を完成させ「よさカード」を修正する。
ワラ作品の仕上げ
よさカードの修正
- 5 次時の学習へつなく

本時の評価

- ・ ワラについての疑問をコーディネーターに聞く活動を通して、ワラの通気性、保温性などのよさやくらしの豊かさについての認識を深め、よさカードを修正することができたか。

（第2回養成講座から）

授業を見る視点

- 視点1 学習者の学びのための条件づくり
- 視点2 授業のための条件づくり
- 視点3 教育課程のための条件づくり

提案授業「4年 西っ子いきいき学習（総合）」を参観して

視点1 学習者の学びの条件として

水田を目にしたことがない児童もいるという環境の中、水田を作るところから体験をするようにし、興味や課題意識をつないでいくためには、様々な支援が必要である。「子どもがのってきたか。自分のものとして考えるきっかけがあったか。」と考えたとき、今まで育ててきた植物との比較学習からワラの有用性に気づくようにしていた。ワラの温かさや柔軟性といった特質にふれることで、一人一人の興味関心をつなぎ、課題意識を持つようにしていた。

また、情報収集する力として伝え合う力を重視し、参観の会場から、話し合いの様子に大きなうなり声が出るほどの力をつけていた。当日の様子から、子どもたち一人一人が会場のたくさんの人たちにメッセージを伝えることができたことが、一番の学びの条件になったかと思われる。自信を持ってグループや学級全体で話し合っていた姿や、子どもたちから参観者への説明の中に大いに感じ取れた。

さらに、教師の「～しましょう。」「～お願いします。」という言葉づかいは教師の立つ位置を示していた。課題を解決するために、共に考えるといった立場に立っていた。

視点2、3 授業のための条件づくり、教育課程のための条件づくり

あえて地域に不足しているものから課題をとらえているため、難しかったと思われる。貴重な体験活動を設定するための条件をつくり、価値付けることや次の課題へとつなぐための教師自身のパワーが大きかったことが分かった。さらに年間を通して、地域と関係を取りながら「自然・生命・文化・伝統」を課題とした、生活科総合的な学習の一貫カリキュラムへとつないでいったと思われる。
(高松市：小)

提案授業「4年 西っ子いきいき学習（総合）」を参観して

視点1 学習者の学びのための条件づくり

ワラのよさを見つけるために、自分が体験したことをまとめたり、人から聞いたり、資料を調べたりする。そのためには、話す力や聞く力などを日頃から育てていく必要がある。屋島西小では、日頃からこれらの力の育成に力を注ぎ、伝え合う力の育成をしている。

また、グループ内での話し合いの手順を作成して、身につけさせることで、自分の考えを他者に伝え、共に問題を解決していくことができる。本時の中でもグループでの話し合いが、有効に働いていた。

視点2 授業のための条件づくり

「本物の体験や観察を通して課題を追求し、振り返り学習により知的な気づきを確かなものにする」という考えのもと授業づくりをしていた。

そのために本時に至るまでに、様々な体験の積み重ねをしている。校舎の3階で稲作りに取り組み、それに関わる土作り、代掻き、種籾の選別、田植え・・・等様々な体験をしていた。それらの体験があったからこそ、ワラやもみがら、ぬか等に目を向けることができた。ワラのよさを見つける本時の学習でもそれらの活動が生かされていた。

本物の体験をするための場、人等の条件づくりが大切であることが分かった。

(三豊市：小)

提案授業「4年 西っ子いきいき学習（総合）」を参観して

視点1 学習者の学びのための条件づくり

水田が校区内にほとんどなく、田んぼを見たり触れたりしたことがない児童がほとんどという実態の中で、日本文化そのものである米作り、米文化、ワラ文化を探究する学習を設定していた。そのために、本物の体験ができる場として、3階ピロティーに実際に水田を作っていた。4クラス分の水田を作り、実際に田植えから稲刈りまで体験できる場所を校内に作っていたのである。また、本物の体験や観察を通して課題を追究し、振り返り学習により知的な気付きを確かなものにしていった。

視点2 授業のための条件づくり

ワラを使った作品を児童自身の手で仕上げていくうちにワラに対する興味関心が高まり、いろいろな疑問が生じてきた中での本時であったように思う。自主的に課題追究した児童がコーディネーターになり、他の児童の質問に答えられるように学習の場を組んでいた。また、ゲストティーチャーを招いて、専門的な立場から説明していただける場も設定していた。児童はワラの特性を理解することで、その特性を生かした作品づくりに取り組めるとともに日本文化に触れるという目標に対してこのような場は有効であると考えられる。

（高松市：小）

(1) 体験を通して生まれる学習課題

子どもたちは、各々「ワラを使ったものづくり」という体験から、解決したい学習課題をもって本時をむかえていた。体験を通して、ワラのもつすばらしさやものづくりのたいへんさ等を感じているからこそ、「もっと知りたいこと」や「疑問に思うこと」が生まれ、一人ひとりの学習課題として認識されていったのだと思う。ただし、体験のやりっ放しではなく学んだことの記録がポートフォリオの形でファイリングされていることが大切なのだと改めて認識させられた。

(2) 交流によって高め合う学習課題

各自の学習課題は、話し合う活動によって解決へと進んでいく。課題を集約するためのグループでの話し合いでは、各自が疑問点をカードに書き、それを持ち寄ることで視点のはっきりとした交流が見られた。そして、集約された課題は、専門家等への質問という形で解決されていった。その際、専門家から多くの知識を学んだ児童を「コーディネーター」とし、子どもどうしでの情報交換によっても解決が図られるような工夫が見られた。ここでの交流は、疑問の解決とともに、各自が活動を振り返り、体験や活動の意義を再確認するものでもあったように思う。

(3) 自己評価によって深まる学習課題

子どもたちは、疑問点等を解決し、再びものづくりに没頭する。ワラの作品のよさを再確認し、自分のものとして自信を持って作品を仕上げていこうとする子どもたちの熱意が感じられた。そして、「よさカード」の修正を通して、本時の学びを振り返るため「育てたい力」の自己評価が行われた。そこでは、本時わかったことや学んだことが語られ、交流によって解決したことへの十分な評価であったと思う。ただ、わかったことに対する自分の考えや思いも表出させる場面があれば、ワラのよさをより自分の課題としてとらえていくことにつながっていったのではないかと思った。

（高松市：小）

提案授業「4年 西っ子いきいき学習（総合）」を参観して

地域課題に迫る力として、豊かな体験・豊かな言葉をもとにした「伝えたい力」をつけることをねらいとしていた。「直接体験・人との関わり」「伝えたい感動・思い」に重点をおき、豊かな心をもった児童の育成に取り組んでいた。また、学んだこと分かったことを自己表現するためにグループ学習を取り入れながら「話す・聞く・話し合う力」を育てようと、教室に「伝え合う力一覧表」を掲示し、教師も児童も常に意識して取り組んでいた。

提案授業では、「ワラを生かした日本の文化を探ろう」をテーマに、ワラにふれたことのない児童に関心を高めさせるため、調べ学習だけで終わらせず、ワラのよさを実感するために、ワラを生かした物を実際に利用したり、ワラを使って物作りに挑戦したりしながらワラのすばらしさを探究していた。さらに、コーディネーターとの交流を取り入れながら、ワラについての自分の疑問を解決していた。自分の疑問や思いを的確に相手に伝えたり、教えられた内容を受け取ったりして、コーディネーターとの双方向の交流により国語力の育成も図っていた。

特に本時の授業では、古民家風の家を設置した中に自分が作ったワラの作品を飾り、そのよさを説明しながらもさらに詳しく聞きたいという気持ちを高めようとする教師の支援が見られた。それぞれの聞きたいことを専門家や児童のコーディネーターに質問することで、総合的な学習の時間のねらいである「自ら課題を見付け自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」が育ってきていると感じた。また、「育てたい力」評価表の評価規準の中の「ワラを生かした生活に日本人の知恵が詰まっていること、稲は全て余すところなく利用され無駄がないことが分かる」（学びとる）でも分かるように、ねらい（2）「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える」ことができるように学習課程や授業も考えて、実践を重ねていた。

総合的な学習の時間のねらいや育てたい力の明確化がこれからの課題であるならば、屋島西小の実践には改善の視点である「学習に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会との関わりに関すること」が、地域社会や地域の人たちとの交流を通して明確にされていた。

（高松市：小）



4年 西っ子生き生き学習 公開授業

「講師に聴く」から学ぶ

講師

文部省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

田村学先生

屋島西小学校の研究発表会の最後は、「講師に聞く」というテーマで生活科・総合的な学習の時間の改善方策等について、講師の田村学教科調査官が指導助言するというものであった。

総合的な学習の時間の一層の工夫改善が求められている今、研究発表や提案授業をもとに授業改善についての話は、実践の方向性を示唆するものであった。

ここでは、田村教科調査官の話を聞いての報告書をもとに、授業改善の基本的な考えを探ることとする。

田村学教科調査官の指導助言を聞いて

「講師に聞く」から学ぶ

- ・ 素材選びは、学習内容・子どもの実態・地域素材から
- ・ 「振り返り学習」において気をつけたいこと
 - ・ 体験がなければ子どもの学びはない。子どもにとって本当に楽しい学びとなっているかを考えなければいけない。
 - ・ 生活科と総合を一緒に考えてはいけない。教科としての生活科と総合とは違う。
 - ・ 生活科は、まず活動に没頭して自分自身に気づき（自己の存在感・自分自身の良さ・成長・変容等）総合は自己をじっくり見ていく（内省）ものである。
- ・ 評価のための評価カードになっていないか。
 - ・ 指導と評価の一体化、次の指導へどう改善していくかをみていく。
 - ・ 子どもにとってそれがどういう価値があるのか どういう活動にしているのか。どういう自分になりたいのか。
 - ・ 説明責任が果たせるように。評価するとき根拠をもって語れるように。
- ・ 授業を考えると、体験はしているが学習として成立しているかが大事である。表現や振り返り学習を重視すると、教師の指導性が強く出てしまいがちとなる。子どもの願いや思いから離れていってはいないか、そのために子ども一人一人をみていかなければならない。
- ・ 「育てたい力」（学習方法に関すること・自分自身に関すること・他者や社会との関わり）を明確に。社会に出たとき行動力・考える力・チーム力（複合的な組織におけるチーム力・コミュニケーション力）アウトプットするプレゼンテーション力が大切になってくる。そういう力についても考えていきたい。

（観音寺市：小）

「講師に聴く」から学ぶ

田村調査官の講話は、生活科，総合的な学習が今後どのような方向へ進んでいけばよいかを示してくれる内容であったが，総合的な学習については時間がなかったためほとんど聴くことができなくて残念であった。総合的な学習について述べられた中で学んだことをまとめる。

総合的な学習に対する教師の意識を高める

「体験あって学びなし」「体験して表すのみ」といわれている総合的な学習に対して，教師自身の意識をどのように高めていけばよいかについて次のようなことを学んだ。

・ 振り返り学習がめざしているもの

総合的な学習の学習過程は，「課題をもつ」「体験・観察」「思考・表現」「体験・観察」「思考・表現」「振り返る」というサイクルで学習が展開される。「体験・観察」「思考・表現」を繰り返すことにより，さらに，気づきが深まったり，思考や表現する力が深まったりすると考えられる。

その後，振り返る学習を行うことにより，人間認識が高まる，つまり，知的気付き・自然認識・社会認識が高まることをめざしている。

・ 地域に根ざす学校づくりについて

地域課題をはっきりと捉え，一貫性のある学びのあるカリキュラムづくりが必要である。地域単元としての一貫性は，地域との関連を十分には図りながら進めていかなければならない。その一貫性のひとつとして，育てたい力を設定することが重要である。

・ カリキュラムづくり改善の方向性について

カリキュラムは次の視点で作成する。

「趣旨」「ねらい」「育てたい力」「内容」「学習活動」については，教科・横断的・総合的な学習の明確化から説明する。

については，実社会や実生活とのかかわりから設定する。

については，学習方法・自分自身・他者や社会とのかかわりに関することについて具体化した内容を設定する。

については，各学校で地域の実態に即した内容・活動を設定する。

こういう視点に立った総合的な学習のカリキュラム編成の見直しの重要性を学んだ。

・ 気づきの質を高めることについて

総合的な学習での学びにおいて，体験 表現だけに終わらず言葉の重視と体験の充実を考えねばならない。

その方法のひとつとして，総合的な学習の過程において，読解のプロセスを意識して学習活動を行うことが求められている。体験を通して手に入れた数値データや言語情報などを子どもが分析したり，統計資料や測定結果などを分かりやすく表現したりして，自己の考え方を確かなものにしていく思考の進め方を身に付けることが大切である。

(高松市：小)

「講師に聞く」から学ぶ

- ・ 生活科と総合的学習を、すべて同じにしてはいけない。生活科と総合的学習には違いがあり、生活科は主に「できた喜び」、総合的学習は主に「自己を見つめること」につながる学習である。
- ・ 評価のためのカードはあまりよくない。子どもにとって、どういう意味があるのか、子どもの成長・変容につながるもの、説明責任を果たす（根拠を持って話せる）を考慮した評価カードにしなければならない。
- ・ 幼・小の連携については、活動の交流 教師の交流 カリキュラムの交流と発展していくものと考えられる。その際、意識（ねらい・目的・目標）の統一がポイントとなる。
- ・ 社会基礎力とは、行動、考える、チーム力（コミュニケーション・表現力）である。
- ・ 言葉の重視と体験の充実を考えた生活科・総合的学習を進めていく必要がある。言葉の育成を支える体験が、思考力や気づきを高めることにつながる。
- ・ 総合的学習の改善の方向性は、教科、特別活動、選択教科など各教科等との関係の整理、ねらいや育てたい力の明確化、児童生徒の発達段階に応じた内容の整理、である。
(綾川町：中)

「講師に聞く」から学ぶ

屋島西小学校の視点の中に、『振り返り学習』があった。体験・観察、表現活動を進めながら、以前の体験や表現活動を振り返るものである。学習者としては、経験したことをもう一度振り返ってもらい、つなげていきたいという願いはよく分かる。ただ低学年の児童にとっては、学習を振り返って、次に生かしていくことは難しいことだと考える。高学年においても、いつも振り返りでは、かえって経験したことが色あせるのではないかという危険性を感じた。要はどこで振りかえる場所を取るかということだと思う。講師である田村学先生の「よい体験がなければ、よい学びはない。」という言葉は、総合的な学習の時間の核心をついていると感じた。

「教師が指導力を発揮すると、子どもの意識からかけはなれる(こともある)。」田村先生の言葉であるが、確かにそういう部分はあると思った。総合的な学習の時間の発表会に向けて、こちらが指導力を発揮することは、よくあることである。子どもの意識に沿うというより、こちらのイメージに合うものを求めているだろうか。各学年でテーマを決めている以上は、ある程度仕方のないことであるが、常に子どもの思いを知っておく必要があると思った。
(高松市：小)

「講師に聞く」から学ぶ

総合的な学習の時間の素材選びの要素は、学習内容・子供の実態・地域の特性の3つであること、「体験あって学びなし」とよく批判されるが、「体験なしでは学びなし」を忘れてはいけないこと、評価カードは、子供にとってどういう気付きがあって次につなげられるかが記入できるようになっていて、正しい説明責任が果たせるようになっているかが大切であること、等多くの示唆をいただいた。

また今回の研究提案のポイントの1つである「振り返り」についても、振り返りを大切にすることは意味のあることだが、それを目標にしてはいけない、思考を深めさせる際には気をつけて対応すべきこと等も指摘された。

最後に、総合的な学習の時間を通してこれから身に付けさせたい力、必要な力は、複合的なチーム力・コミュニケーション力とアウトプットするプレゼンテーション力ではないかとお聞きし、そのような力をつける場を他教科とも連携して設定していかなければいけないと感じた。
(坂出市：中)

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

教育講演から学ぶ

平成18年11月28日(火) 12:45~16:45
香川県教育センター

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座は、香川県教育センターが実施する教育講演を研修内容とし、鳴門教育大学村川雅弘教授の講演を聞いての研修報告をもとに、総合的な学習の時間の充実を図るための方策について考えることとした。

演題

『人間力』を育む総合的な学習の充実化のための具体的戦略を探る

講師 鳴門教育大学 教授 村川 雅弘 氏

**総合的な学習は、地産地消の創作料理である。
教師は一流のシェフにならなければならない**

講演の中で、一番心に残ったのは「『総合的な学習の時間』は、地産地消の創作料理である。」という言葉である。旬のものを使い、味付けを工夫して、おいしく食べていただいて、栄養もとれる。その結果、また食べていただく。そうなるためには、教師は一流のシェフにならなければいけない、ということである。
(琴平町：小)

「総合的な学習は、地産地消の創作料理である。それらは、ごっこ遊びではなくrealでないとならない。よって教師は、一流のchefとなれ!」という呼びかけから始まった講演は、たいへん有意義であり、コーディネーターとして励まされるものであった。
(観音寺市：中)

講演の主な内容

総合・体験・学力をめぐる10の疑問

総合的な学習の時間はどうなる	人間力とは何か
総合で育む力とは何か	課題設定づくりをどう行うか
豊かな体験を確かな学力にするために	なぜ表現・発信なのか
なぜポートフォリオ評価なのか	教科との関連を図るには
教科等との関連を図るための研修とは	知の総合化とは

講演の内容を報告書にまとめる その1

1 「総合的な学習は、まさに地産地消の創作料理」～「和菓子プロジェクト」の実践から

総合的な学習は、児童の興味・関心を引き出すことから始まる。児童や地域の実態に基づいたカリキュラムを作成し、児童の活動意欲を引き出す適切な支援を行うことによって、「楽しい学習」を展開し、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、人間関係調整能力など、多様な力を育てることが可能になる。

「和菓子プロジェクト」の学習においては、市場調査（店舗での聞き取り、アンケート調査、インターネット調査）、新商品の企画、プレゼンテーション（専門家による審査）、審査結果1位の菓子の企画書作成（次点以下の企画グループからの要望も取り入れて）、再グループ化による商品化（パッケージのデザイン、添え書きやポスターの制作、販促活動）というプロセスを経て、実際に和菓子の新商品の販売にまでこぎ着けた。児童は「よい和菓子を作りたい」という目標を持って活動したわけだが、教師の目標は前述のような多様な力を身に付けさせることにある。総合的な学習の充実化を考えると、このような目標の二重構造も大切な要件となる。

2 次期学習指導要領における総合的な学習～より充実の方向へ

(1) 総合的な学習充実化のための課題（充実化のための視点）

テーマ設定、具体的な実施内容の難しさ

必要かつ適切な指導が実施されていない面があること

教科との関連に十分な配慮がされていないこと

各校で具体的な「目標」「内容」が設定されていなかったり、小・中・高で学習内容の重なりが見られたりすること

総合的な学習の導入により、進学（国公立大学合格）率が向上した高校もある。また、進学先自体も「将来の生き方を考えた選択」へと変容している。総合的な学習が学力の向上をもたらし、学習の過程で培われた興味や関心が将来の目標へとつながっていくことを忘れてはならない。

(2) PISA型読解力の育成

PISA型読解力（問題解決のために複数のテキストを読み、自分の考えをまとめ、表現する力）を育てるためには、次の4つの学力をバランスよく身に付けられるようにすることが大切である。

学んだ力（知識・理解）

学ぶ力（見つける、調べる、まとめる、伝える、振り返る…）

学ぼうとする力（社会・自然に対する興味・関心、かかわろう・よくしようとする態度、自信、個人目標の設定…）

学んだ知識・技能を総合的に活用する力（～の学力は、総合的な学習のねらいと照応）

(3) 表現・発信の意義

他の人に伝えるための表現を考える中で、子どもたち自身の学びも深まる。確かな情報（社会についての知識や科学的な技能）を得る過程では社会科や理科、家庭科等での学びが生き、それをうまく伝えるための的確な語いや豊かな表現力は、国語科や音楽科、図工科等の学習を通して培われる。全体学習やグループ学習、個人学習、そして国語科や社会科、理科、図工科、音楽科等を有機的につなぐことにより、総合的な学習の充実化が可能となる。

3 ワークショップの効果

気付きの整理や振り返りの段階でワークショップを取り入れることにより、見通しをもって遂行する力の向上を図ることができる。教員チームにおいても、全体計画の作成やカリキュラム評価、マニュアル作成やロールプレイ等のワークショップ型研修を導入し、「学校力」の向上を目指したい。

（東かがわ市：小）

講演の内容を報告書にまとめる その2

「総合的な学習の時間はどうなる」から

総合的な学習の時間の課題としては、教員の負担感、学習テーマ設定の難しさ、具体的な実施内容に関する悩み、教科との関連が十分でない、各校で具体的な「目標」「内容」が設定されていないといったような、校種間・学校間・教員間の格差があげられる。それを解決するためには、ねらいの明確化と身につけさせたい力の例示、発達段階に応じた内容の整理、教科・特活・選択教科との関係の整理、小・中・高への具体的な手引きが必要になる。

「人間力とは」から

人間力とは、自立した一人の人間として生きていくための総合的な力である。現実の社会で大人がどのように生き、そこで何が必要とされるのかを見せることによって、学ぶことの意義を子どもたちに伝え、何のために学ぶのかという目的意識を明確にすることが大切である。

「総合で育む力」から

子どもにつける力としては、

(1) 学んだ力(知識、理解)

(2) 学ぶ力(見つける、調べる、まとめる、伝える、振り返る)

(3) 学ぼうとする力(社会・自然・人に対する興味関心、関わろう・よくしようとする意欲、自信、個人目標の設定)

(4) 学んだ知識・技能を総合的に活用する力

があげられる。人生の成功(幸福と成功をもたらす力)と社会的発展を両立させるコンピテンシーとして、以下の3つをキー・コンピテンシー(世界標準学力)として定義づけた。

(1) 相互作用的に道具を用いること【道具活用のコンピテンシー】

(2) 異質な集団で交流すること【人間関係のコンピテンシー】

(3) 自立的に活動すること【個人形成のコンピテンシー】

総合的な学習の時間では、効果が期待できると考えられる。大切なのは、すべての個人の発達力と家庭、学校、地域の教育力・発達力が相互作用的に力をつけていくことである。

「なぜ、ポートフォリオなのか」から

教科の場合は、事前に目標が設定され、その目標との関連において評価される。つまり、ゴールと今の状態を比べて評価される到達度評価である。しかし、総合的な学習では、スタートと今の状態を比べて評価する成長度評価といえる。子ども一人ひとりが自分の伸びを自覚し、自信をつけることが重要で、そのための振り返りの証拠としてポートフォリオが重要な役割を果たすのである。

「教科との関連を図るための研修」から

コーディネーターの仕事は、自校の先生方に関心を持って、いかに子どもたちに教育的な効果をもたらすかを考えることである。そのためには「教科のどんな力が、総合的な学習の活動のどの部分で生かされているのか」といった単元レベルにおける関連を明らかにしていくことが必要になる。

そこで、ワークショップを行うことが考えられる。まず、総合的な学習の年間指導計画と教科書、模造紙、付箋を用意する。年間指導計画を模造紙サイズに拡大し、学年団で単元や年間指導計画の具体的な内容・活動と、教科書の内容とを比較し、付箋には関連する教科書の頁数と関連事項を書く。内容面と技能面において、相互の関連を整理・構造化していく。こういったワークショップを通して、教科との関連が明確になるし、学年団での共通理解も図られる。

(丸亀市：小)

講演の内容を報告書にまとめる その3

「総合的な学習の時間は今後ますます充実化の方向にあり、いわば地産地消の創作料理でなければならない。そして、それを実践するべき教師は、一流のシェフにならなくてはいけない。」という印象的な言葉から始まった講演会から多くのことを学んだ。自校の教育実践改善のために次のようなことを考慮していきたい。

1 育てる力をはっきりさせた計画立案

- ・ 子どもはその活動を楽しんでいるが、教師にはそこで育てたい力が見えていないではない。教師と生徒の目標の二本化。
- ・ 「人間力」とは、自立した一人の人間として生きていくための総合的な力である。学ぶことの意義を子どもに伝え、いろいろな大人と本気で継続的にかかわることを通して、子ども自身が協力しながら問題を解決し、つなげていくところに学びがある。それを可能とする活動やカリキュラムが必要である。
- ・ 子どもにつけたい学力をきちんととらえ、全体学習、グループ学習、個人学習をうまく組み合わせながら学びの経験をつなぎ、力をつけていくようにカリキュラムを立てる。

学んだ力（知・理）

学ぶ力（助ける、調べる、まとめる、伝える・・・）

学ぼうとする力（社会、自然、人に対する興味・関心、かかわろう、良くしようとする意欲、自信、個人目標の設定・・・）

学んだ知識・技能を総合的に活用する力

2 各教科等と総合的な学習の学びの関連を図る

- ・ つけたい力を教師と子どもが決めて教室に掲示し、総合的な学習の時間だけでなく学校生活のあらゆる場面で達成できるようにする。
- ・ 子ども自身がいろいろな場面での自分の学びを振り返り、整理し、自分の成長を感じ取り、自信をもたせるように仕組んでいくことが大切である。

3 ポートフォリオによる自己評価

- ・ 一人一人の子どもがスタート時と比べての自分の成長を評価できることが大切。
- ・ 徳島県の、多様な学びをつなげる新しい評価はたいへん参考になった。3年間を通して自分の成長を振り返ることができるようにすることが大切である。

4 ワークショップ型研修を取り入れて充実化を図る

- ・ 年間計画に、教科での学びに関連するものや安全・危機管理に関するものを貼って構造化していくことで、教師間での共通理解や情報の共有化が図られるので、ぜひ、取り入れてみたい。学級、学年間の格差を縮めることにもつながると思った。

（直島町：中）

講演の内容を報告書にまとめる その4

1 「人間力」を育むために

現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされるのかを見せることによって、学ぶことの意義を子供たちに伝え、何のために学ぶのかという目的意識を明確にすること

2 生涯にわたって生きて働く力とは

学んだ力（知識・理解）

学ぶ力（見付ける・調べる・まとめる・伝える・振り返る・・・）

学ぼうとする力（社会・自然・人に関する興味・関心、関わろう・よくしようとする意欲・自信、個人目標の設定・・・）

学んだ知識・技能を総合的に活用する力（具体的な場面で）

これら4つ学力を総合的な学習の時間にバランスよく身につけさせたい。

3 総合的な学習の時間の充実化にむけて

「主体的・協同的問題解決スキル」育成を意識した計画立案することで

- ・ 子供一人一人が自らのあるいは社会の問題に関心を示し、その解決を図っていく力の育成
- ・ 子供たちがお互いのあるいは社会の問題を直視し、その解決にむけて協力し助け合っていく力の育成

が可能となる。このスキルは、具体的な活動の中で実際に活用されることによって培われる。

子供の発達段階や既存の教科内容との関連においてこれらのスキルを子供一人一人が発揮せざるを得ない活動を、子供たちがお互いに協力し、あるいは異なる世代・立場の人と協力して発揮せざるを得ない活動を、どのように組み入れて単元やカリキュラムを開発していくかが重要である。

4 総合的な学習充実化のための研修として

教育目標の具現化・共有化

「どのような実態」をもとに「どんな力」を育むのかを教職員が共通理解しておくこと

他教科との関連を意図した全体計画の見直し

教師の作成した年間指導計画レベルにとどまらず、「教科のどんな力が、総合的な学習の諸活動のどの部分で生かされているのか」が具体的に子供に理解されるように、単元レベルにおける関連を明らかにしていく。

これらをワークショップ型研修とすることで

- ・ 学校現場の日々の授業や経営に関する課題が持ち込まれる（具体性）
- ・ その解決に向け、参加者が知や経験、専門性を認め生かし繋げ解決しようとする（問題解決性・協働性）
- ・ その解決策を明日の実践に生かす（実現性）
- ・ 一連の過程において互いに力量を高めあい、その学び合いの文化が日常化することが可能となってくる。

これは、子供たちの「人間力」育む学校を実現するための、「学校力」と「教師力」を同時に向上させていくのに有効である。

（坂出市：小）

1 なぜ、「主体的・協同的問題解決スキルの育成」なのか

村川氏の講演のレジュメの中に、現代の子どもたちを分析して「今の子どもたちに変化とは、煎じ詰めれば、他人への関心と愛着と信頼感をなくしていることであり、自分がふだん生活している世界がどんなところであるかを自分の体で実感できなくなっている」と門脇氏の言葉を借りて指摘している。そういう現状があるからこそ、子ども一人一人が自らのあるいは社会の問題に関心を示し、その解決を図っていく力の育成だけでなく、子どもたちがお互いのあるいは社会の問題を直視し、その解決に向けて助け合っていく力の育成が強く求められているのである。

ただ、問題解決へ向けてのスキルが簡単には子どもたちに身に付かないことも村川氏は指摘していた。そのスキルは、具体的な活動の中で実際に活用されることによって培われる。子どもの発達段階や教科内容との関連において、これらのスキルを子ども一人一人が発揮せざるを得ない活動を、子どもたちがお互いに協力し、あるいは異なる世代・立場の人と協力して発揮せざるを得ない活動を、どのように組み入れて単元やカリキュラムを開発していくかが重要となるのである。

自分の今までの取り組みを振り返ってみると、子どもたちは体験を通して見いだした問題を整理し、取り組むべき課題を設定して、様々な方法を使い課題の追求を進めている。しかし、そこに教師の必要かつ適切な指導を行っていたかと言えば、子どもたちの自由な学習の様子を見て満足し適切な指導を怠っていたと反省される。ましてや、取り組む課題の見直しや解決のやり直しなど行っているはずもなかった。子どもたちの設定した課題についてグループで調べ、課題解決を図っているようで実際には「解決されるべき課題であったのか」といった振り返りもなければ、「異なる世代・立場の人と協力して発揮せざるを得ない活動」を子どもたちと一緒に考えながら組み込んでいたかと言えば、協力していただいている地域の方との連絡を十分に取らずに教師の思いこみだけで活動を進めていたように思う。単元やカリキュラムを年度内に見直し、教科学習等との関連をもう一度見直し、子どもたちの身に付けるべき4つの学力（特に、「学ぼうとする力」）をどこでどのようにつけていくかを教職員間で検討したい。

2 各教科等と総合的な学習の学びの関連を図る

現行学習指導要領の一部改正の中で、総合的な学習のねらいに「各教科、道徳および特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連づけ、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」が付け加わった。篠山市立今田小学校では、地域の絶滅種を育て、その成果を地域の人に発信する取り組みを続けている。子ども同士が励まし合いながら、時には厳しく批評・助言し合いながら、「伝えたい」という強い気持ちに支えられながら伝える力を高め合っていた。『今田の自然環境フォーラムを開こう』を目標に、児童の学習成果を発表するとともに自然を守るプランを実行していたが、それを支えていたのが「切磋琢磨シート」の自分の思いの整理であろう。友達との相互評価も活用しながら集団の意識も高め、児童の表現力を育てていた。教科との関連は、内容面・能力面の両側面からの関連を考え、当該学年の教師や協力教師が集まり、単元や年間指導計画の具体的な内容・活動と教科書の内容とを比較し、付箋には関連する教科書の頁数と関連事項等を書き、相互の関連を整理・構造化していく取り組みが紹介された。自校でも年間指導計画と教科の内容の関連等を整理するなどして全体計画の見直しを図っていきたい。

3 総合的な学習充実のためのワークショップ型研修の有効性

講演の中では、望むべき義務教育の改革目標として「学校力」と「教師力」の向上をあげ、総合的な学習の時間の充実化のためにワークショップ型研修の有効性について述べていた。その中には、「教育目標の具現化・共有化」のための「育てたい力」の整理・構造化とカリキュラム作り、他教科等との関連の構造化と全体計画の見直し、校外活動活性化のための安全・危機管理等、学校現場の日々の授業や経営に関する課題についての具体的な方策や課題解決に向け、参加者が知や経験、専門性を認め生かし繋げ解決するための方策等が述べられ、大変参考になった。教師力が向上すれば、子どもたちの学力も向上してくるという例に学ぶとともに、教職員の組織力も同時に高め、学校の活性化にもつなげたい。ワークショップ型研修を学習活動に取り入れるとともに、教職員の研修にも積極的に取り入れたい。

(高松市：小)

実践事例紹介

村川先生の講演では、総合的な学習の時間に熱心に取り組む小中学校の様子がVTR等で具体的に紹介された。映像に映された子どもたちの活動の様子やそれに対する村川先生の解説は、総合的な学習の時間の在り方を考えさせ、実践化への意欲につながるものであった。

ここでは、紹介された事例のうち、2事例に対する感想や意見を紹介する。

徳島県小松島市立小松島南小学校 和菓子プロジェクトの取組から

和菓子プロジェクトについて

総合的な学習の時間での子どもたちへの明確な目的の設定とゴールまでのプランづくり、またその過程におけるグループ再編成のしかたや外部からの評価・広報活動など、実践に基づく具体例を示され非常にわかりやすかった。このプロジェクトでは、子どもたちが問題解決に取り組む一連の学習を通じて「主体的かつ協動的に問題を見つけ解決するスキル」の育成することを意図しており、総合的な学習の時間の子どもたちの目標と教師の目標が異なる「目標の二重構造化」を図って計画立案することが、総合的な学習の時間の充実のための重要なポイントであることがよくわかった。

(高松市：中)

和菓子プロジェクトの実践に学ぶ

総合的な学習は地産地消の創作料理である。教師は一流のシェフにならなければならない。小松島市立南小松島小の6年生が総合的な学習で開発した「和菓子プロジェクト」の取り組みを例に紹介していただいた。

まず、アンケート調査やインタビューを通して情報を集め、新商品開発企画書を練る。次に、お菓子の試作品をグループで作りと、審査会を開いて何度も改良を重ねていく。そして、商品化を目指すために広報活動も含めて、地域の人や専門家の知恵に学びながらお菓子を創作していく実践であった。現在、その思いが後輩たちにも引き継がれるとともに、将来、ふるさとを離れた南小松島小の子どもたちが大人になってもこの活動を自分たちの誇りに感じ、自信をもって人生を切り開いていける学びだと感じた。

(善通寺市：小)

「主体的・協同的問題解決スキル」育成を意図した計画立案

問題解決過程におけるスキルには、「子ども一人ひとりが主体的に取り組んでいくのに必要なスキル」と「友だちや、場合によっては異なる世代や立場の人と協力しながら取り組んでいくのに必要なスキル」がある。そして、これらのスキルを子ども一人ひとりが発揮せざるを得ない活動や、子どもがお互いに協力し、あるいは異なる世代・立場の人と協力して発揮せざるを得ない活動を、組み入れた計画の立案が重要である。紹介された徳島県の「和菓子プロジェクト」の実践では、自分たちが企画した和菓子の商品化や、そのためにコンテストをするといった、子どもたちの主体的な取組が期待できる課題であった。市場調査や売り出し企画の活動では、班活動を組み、再編成により違った友だちとの協力の場面を仕組んでいた。また、市場調査で地域の人にインタビューやアンケート調査をしたり、和菓子職人の人と商品について話し合ったりする活動があり、スキルを発揮する場となっていた。

(三豊市：小)

今田小学校の実践からは評価の重要性を学んだ。今田小では評価規準を「20のつきたい力」として教室に掲示することで児童自身が明確な規準をもっている。また、それによって教師の指導が漠然とした情意的なものでなく、規準に照らし合わせた指導になり、生徒の活動がより焦点化されている。さらに、「つきたい力」が個に対するものだけでなく、クラス全体でつきたい力でもあることは、日常、教師側は意識しているが、児童に周知することで児童らが自ら集団の力を育てているようであった。自校では、指導と評価を一体化させるところまで至っておらず、その点でも研修が必要であると感じた。

(土庄町：中)

中でも一番心に響いたのは、篠山市立今田小学校の取り組みの映像であった。子どもたちが、あんなにも堂々といきいきと、自分たちの調べてきたことを工夫して発表、表現できるとは……。胸が熱くなった。そこには「生き物を守るために、人に何かを伝えたい」という強い気持ちがあったからだという。それは社会貢献にもつながっている。ただ単に調べる、学習するというのではなく、強い目的意識があればこそ、主体的に学習に取り組み、表現、発信できるということを目の当たりに見せてもらった。また子どもたちは活動を通して、感動することや友達のすばらしさ、思いやりの気持ちを持つこと等にも気づき、大きく変わっていったようである。その経験を経て下級生に教えている光景にも驚かされた。子供の持つ力のすごさと同時に、そのしかけをした先生方の努力に頭の下がる思いがした。

(坂出市：中)

とてもすばらしい表現力が身につけていることに驚いた。これは、総合学習で学んだ生き物を守りたいという強い願いがあり、実現するためには「地域の人に伝えなくてはいけない。」「伝えたい。」という思いがあるからである。ゆえに、しっかりとした知識・技能をきちんと身につけることで、大切なことがらが理解できる。これも大切にしなければいけない。

実践した自然環境フォーラムは、表現練習のために、個人学習、グループ学習、全体学習に分けて行っている。今田っ子ワールドでつきたい力は、教室に常時掲示しており、これは個人の目標ではなく、クラス全体で達成する目標である。クラス全体で伸びていこうとする取り組みはとても参考になり刺激を受けた。

(高松市：小)

兵庫県今田小学校の自然環境フォーラムを通して主体的・協同的問題解決スキルを向上させた例からも分かるように、子どもが本気になって取り組む総合的な学習は、子どもの力を最大限に発揮させ、伸ばし、子ども自らの生き方を変えていく。まさに、自立した一人の人間として生きていくための総合的な力である「人間力」を育むものである。

特に、今田小の実践では、子どもの学習の中にPDCAのサイクルがきちんと身に付いていることがすばらしいと感じた。評価規準を各人がもっており、課題に対して協同で適切に評価し改善策を考えていけるといえるのは、かなり高いレベルの学力が身に付いている証拠である。これも、「本物」の学習をし、子どもたちが達成感を味わっているからにほかならない。子どもの「伝えたい」という強い思いは、見ている人に感動を与える発表を生み出す。逆に言うと、感動のない発表は、本当に子どもの思いから出たものかどうか疑問である。

(高松市：小)

総合的な学習の時間コーディネーター養成講座の修了にあたって、研修の成果を生かすという視点から、研修で得た手法や考えをもとに自校の総合的な学習の時間をどのようにコーディネートするかプランとしてまとめることを課題とした。

ここでは、作成要領、作成方法、受講生が作成したプラン等を取り上げ、プラン作成までの過程を紹介する。

研修レポート 作成要領

総合的な学習の時間コーディネーター養成講座の研修レポートの作成について

1 趣旨

平成18年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座の受講生を対象に、研修したことを生かし、自校の今後の総合的な学習の時間を考えたり、自校の取組を紹介したりすることにより、コーディネーターとしての資質や意識を高める。

2 レポート作成について

(1) 作成するもの

- ・ 様式1 「自校の外部環境の把握と分析」、「自校の内部環境の把握と分析」
- ・ 様式2 「小(中)総合的な学習の時間」
(これまでの研修報告書を、デジタル化し(したもの)も提出願います。)

(2) 作成にあたって

- ・ 養成講座のワークショップの成果を参考に、自分が書いたものや他者からもらった意見等を分析し(様式1で)、自校の具体的な方策を考えまとめる(様式2で)。
- ・ できるだけ、自校の校内研修や学校評価の話し合いの場を活用し、全教職員で総合的な学習の時間について話し合い、その結果をレポートにまとめるようにする。
- ・ 記入例「作成について(1)(2)」、自校の全体計画や年間計画などを参考にして、自校の現状や今後の方策について具体的に表現する。

3 提出について

(1) 提出物

- ・ 様式1 「自校の外部環境の把握と分析」、「自校の内部環境の把握と分析」
- ・ 様式2 「小(中)総合的な学習の時間」
- ・ 研修報告書(これまでに作成し、提出したものをデジタル化する)

(2) 提出方法

- ・ 上記(1)を事前に渡しているCD-RWに書き込んだ上、紙媒体3部(様式1, 様式2に関するもの、研修報告書は不要)及び電子媒体(CD-RW)双方を提出期日までに、関係市町教育委員会に提出する。

(3) 提出期日

- ・ 平成19年1月26日(金)

(4) 提出先

- ・ 関係市町教育委員会教育長

4 備考

研修レポートの活用について

- ・ 研修レポートの記述内容等については、成果の普及を図る視点から、学校名、氏名をふせて公表することの了承を願う。
- ・ 提出された研修レポート(CD-RW)は、参考となる資料等を書き込んだ後、各自に返却する。

自校の把握と分析 内部環境

客観的な特徴や事実

要因(

要因例

要因(

要因(

児童生徒、管理職、PTA、学校施設
学校予算 指定研究、校務分掌、行事、教材教具、
時間割、人間関係

強みとしてはたらく場合
(ポジティブなところ)

弱みとしてはたらく場合
(ネガティブなところ)

第1回、2回養成講座で、ワークショップをした「ネガティブ、ポジティブ」の考え方で自校を取り巻く外部環境について整理する。

私の考えるこれからの実行策

* 自校の強みをもっと活用した教育機会や活動、取組は

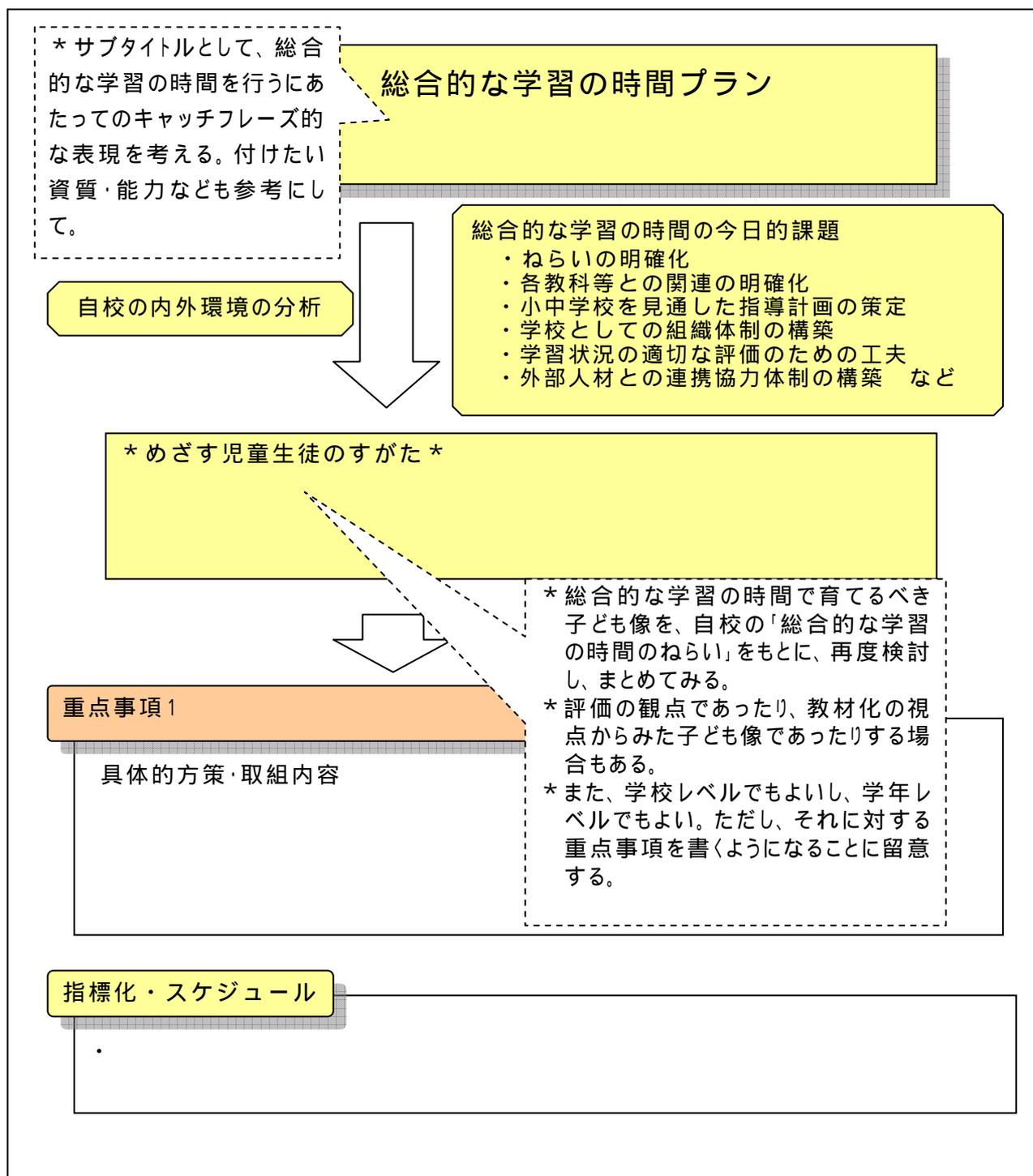
* 自校の弱みを克服するための解決

強みを利用してできそうなこと、弱みを克服する手立てなどを考え、これからの実行策をブレインストーミング的に書き出してみる。
できるできないは関係ない。

2 総合的な学習の時間プランについて

ここでは、総合的な学習の時間コーディネーターとして、自校の総合的な学習の時間を、外部環境や内部環境の分析に基づいて、どのようにプランニングするかを考え、構造的にまとめることとした。

プランニングの視点として、キャッチフレーズ、めざす児童生徒像、取り組みたい事項としての具体的方策や取組内容、達成状況を評価する指標を取り上げ、それについてまとめることとした。



重点事項 2

具体的方策・取組内容

* 自校のポジティブなところ、ネガティブなところを整理、分析し、養成講座で実施した「コーディネーターとしてできること3つ」の考えを中心に、自校の重点事項をつくり、書き表す。重点事項は3つ以上でもよい。

例：子どもの学びの評価の充実、系統性のある年間計画の作成、地域の人材活用のシステム化、児童生徒の学習成果発表の場の工夫、小中の連携の在り方

指標化・スケ

* 重点事項を課題として、今後、解決するための具体的方策や取組内容について書き表す。

* 重点事項に対して、「このようなことをやってみよう」ということや、コーディネーターとして他の教師とともに実践してみたいことなどを、書き出してまとめる。

* 箇条書きでもよいし、より具体的内容を文章化してもよい。

重点事項 3

具体的方策・取組内容

* 具体的な方策について、どこまでできればよいか、いつごろまでに何ができそうかということを、できるだけ数値化して書き表す。

* 具体的方策・取組内容と対応しているのが望ましい。

指標化・スケジュール化

研修レポートの作成事例を、小学校、中学校それぞれ一つずつ紹介する。

研修レポート事例 1 高松市：中学校

自校の把握と分析 外部環境

客観的な特徴や事実

要因（地域環境 自然・歴史）

- ・豊かな田園地帯を有し、ため池や出水もある。
- ・周辺には里山があり、自然環境に恵まれている。
- ・江戸時代初期から門前町として栄え、古くからの町並みや史跡も存在している。

要因（施設・交通事情）

- ・校区に隣接して、県立図書館や香大工学部、インテリジェントパークなど教育・文化施設も充実している。
- ・校区内や校区周辺に、多くの老人施設や養護施設等があり、体験活動にも協力的である。
- ・校区内や周辺に多くの幼稚園や保育所があり、体験活動にも協力的である。
- ・新しくできた道沿いに多数の店舗等が並び、古くからの幹線道とともに、かなり交通量がある。
- ・学校の比較的近くに電車の駅がある。

要因（保護者・地域住民）

- ・PTA活動は盛んである。
- ・保護者に、学校で直接生徒たちの指導にあたっていただく場面は、現在のところはない。
- ・地域住民には、地元の学校という意識が強く、比較的学校の活動に注目している。

要因（小学校等）

- ・校区内には3つ小学校があり、3小学校の生徒のほとんどが本校へ進学する。
- ・校区内の保・幼・小・中全体で校区人権同和教育研修会を年1回実施している。

支援的にはたらく場合

（ポジティブなところ）

- ・校区内の自然環境や史跡などを題材に自分の生きる環境という視点での学習が実施できる。
- ・老人ホームや養護施設、保育所等を利用して、さまざまな福祉体験を実施することが容易である。
- ・小中学校の連携を図りやすい。
- ・電車で、市内中心部にも簡単に移動できる。
- ・校区内や、校区周辺でも、職場体験を実施できる事業所や施設が比較的多い。

阻害的にはたらく場合

（ネガティブなところ）

- ・交通量が多く、校外学習での移動時に安全面にかかりの配慮が必要。
- ・福祉施設では、生徒の親族が入所している場合もあり、生徒のプライバシーへの配慮が必要になる場合がある。
- ・総合的な学習の時間に学んだことや、身につけてきた情報リテラシー等が、校区内3小学校間で大きな差がある。

私の考えるこれからの実行策

- * 自校の外部環境の支援要因でもっと発展させるための活動働きかけや取組は
 - ・校区内の自然や歴史マップを作成し、地域の自然や歴史等に関する学習に活用する。
 - ・福祉施設等については、学校から依頼するだけでなく、共同しての事業や活動を計画し、総合的な学習の時間の活動に取り入れていく。
 - ・地元商工会等を通じて、職場体験活動が実施できる事業所等の拡大を図るとともに、職場体験学習など体験活動の成果等についての広報活動も行う。
- * 自校の外部環境の阻害要因を克服するための解決策は
 - ・体験活動でのコースや体験施設分けのときの事前調査を綿密に行う。
 - ・交通手段や移動経路、時間について事前の調査を充分に行う。
 - ・小学校との連携を図り、小中学校合同で総合的な学習の時間の学習テーマについての研修の場を持つ。

自校の把握と分析 内部環境

客観的な特徴や事実

要因（生徒のようす）

- ・校区内の3小学校から進学してきた生徒たちがほとんどで、中学校3年間での転出入はほとんどない。
- ・生徒たちは素直で、落ち着いて学校生活を送っている。
- ・生徒会活動が盛んで、宿泊学習等の行事等では、実行委員会に積極的に参加する生徒も多い。

要因（学校施設）

- ・教室数が、現在のクラス数で手一杯で、空き教室等がない。
- ・学校施設が古くなり、現在の教育活動でのニーズにマッチしない部分がある。

要因（教師集団）

- ・若年層の教員がほとんどいなく、ほとんどが中堅から年配の教員である。
- ・同規模の他校に比べ、教員数はどちらかというとやや少ない。
- ・総合的な学習の時間への取組は、各学年の担当者の計画によって各学年団ごとに運営されている。

要因（教員研修）

- ・現職教育での研修は、盛んである。
- ・総合的な学習の時間に関する研修は、ほとんど行われていない。

要因（指定研究）

- ・平成17年度から3年間、文部科学省の指定研究事業に取り組んでいる。
- ・平成19年度は、研究発表会を実施する。

強みとしてはたらく場合

（ポジティブなところ）

- ・3年間を見通した計画に基づいて、生徒に学習活動に取り組みさせることが可能である。
- ・生徒は、教師の指示したことに素直に取り組む。
- ・経験豊富な教員が多いため、各教員で計画・運営していくことも可能である。
- ・担当者の考えを中心に、学習の課題やねらいを絞りやすい。
- ・各学年団ごとの生徒の実情に合わせた計画や運営が容易である。
- ・生徒の実行委員会を中心に、体験活動等の計画運営をすることも可能である。

弱みとしてはたらく場合

（ネガティブなところ）

- ・生徒は、教師の指示による行動に慣れ、主体的に判断して行動する面がやや弱い。
- ・個々の教員の考えで動くことができるが、全体の足並みがそろいにくくなることもある。
- ・体験活動で、グループあたりの人数が多くなったり、コースの選択範囲が狭くなったりする。
- ・計画や運営が担当者任せになり、個々の教員があまり主体的に係わっていない。
- ・学年間の連携があまりなく、実践したことが、他学年の教員や生徒にあまり継承されない。
- ・現職教育では、指定研究事業のための研修に大部分の時間を使うため、総合的な学習の時間のための研修の時間を確保することが困難である。

私の考えるこれからの実行策

* 自校の強みをもっと活用した教育機会や活動、取組は

- ・学年団で、年度末～年度当初に総合的な学習の時間の研修の場をもち、担当者を中心に、全教員で総合的な学習の時間の年間計画を作成したうえで、個々の教員ごとに年間指導計画を作成してもらう。
- ・体験活動の内容や実施時期を見直し、生徒の実態に応じた3年間にわたる基本的な計画を作成する。

* 自校の弱みを克服するための解決策は

- ・総合的な学習の時間の発表会に、下学年を参加させ、次年度の学習の内容や方法についての見通しを持たせるようにする。
- ・総合的な学習の時間の体験活動の計画についても、宿泊学習や修学旅行等と同じように実行委員会等を設置して、生徒に主体的に関わらせるようにする。

総合的な学習の時間プラン

人と生きる・自然と生きる・地域と生きる，自分を見つめて

自校の内外環境の分析

総合的な学習の時間の今日的な課題

- ・ねらいの明確化
- ・各教科等との関連の明確化
- ・小中学校を見通した指導計画の策定
- ・学校としての組織体制の構築
- ・学習状況の適切な評価のための工夫
- ・外部人材との連携協力体制の構築など

めざす児童生徒のすがた

- ・自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決できる生徒
- ・学び方やものの考えを身につけ，問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組み，自己の生き方を考えることができる生徒

重点事項 1 生徒の学習成果発表の場の工夫

具体的方策・取組内容

- ・学習成果発表会の参加者の工夫
学習成果発表会への他学年生徒の参加
公開授業として，校区内小学校教職員への参観依頼
体験活動施設の担当者に参観依頼
- ・交流の場としての学習成果発表会の工夫
生徒の学年間での交流の場
(ピア・サポートの場として，次年度の見通しを持つ場として)
生徒と体験活動施設担当者との相互交流の場

指標化・スケジュール化

- ・総合的な学習の時間のねらいと体験学習の内容の検討 3月末までに
- ・各学年の年間計画の作成と学年間の調整 4月末をめどに
- ・総合的な学習の時間の年間計画の各小学校への送付 5月中には
- ・1年は2年の，2年は1年と3年，3年は2年の学習発表の場にそれぞれ1回は参加

重点事項 2 総合的な学習の時間の研修の充実

具体的方策・取組内容

- ・ 公開授業の場の設定
総合的な学習の時間の公開授業の実施
外部の指導者による授業評価と指導
- ・ 総合的な学習の時間の指導法の研修
他校の実践事例を元に
自校の実践を元に、身につけさせたい力とカリキュラムの関係について
協働的職員集団の育成のためのワークショップ型校内研修の実施
- ・ 小中の連携を図るための研修
各小中の総合的な学習の時間の学習内容等について相互理解を図る
総合的な学習の時間の相互参観の実施

指標化・スケジュール化

- | | |
|---------------------------|------------|
| ・ 公開授業の実施 | 年 1 回 |
| ・ 現職教育への研修の位置付け | 年 3 回 |
| ・ 総合的な学習の時間についての小中合同研修の実施 | 8 月 |
| ・ 総合的な学習の時間授業参観 | 各小学校へ年 1 回 |

重点事項 3 地域活用のための基盤づくり

具体的方策・取組内容

- ・ 地域の教材化
地域の自然的環境・文化的環境・社会的環境の把握
地域マップや人材リストの作成
地域の体験活動受け入れ施設事業所の開発
- ・ 地域との連携ネットワークづくり
地域の公共施設との交流
地域の各種団体への協力依頼
- ・ 学習成果の地域への公開
学習活動や学習成果の広報活動の推進

指標化・スケジュール化

- | | |
|--|----------------|
| ・ 自然，史跡，歴史文化に関する地域マップの作成 | 夏季休業中 |
| ・ 地元商工会への職場体験活動への協力依頼 | 5 月中 |
| ・ 地域への広報活動
体験活動についての学習成果広報プリントの作成
公民館への学習成果広報プリントの掲示依頼 | 体験活動毎
6 月始め |

研修レポート事例2 多度津町：小学校

自校の把握と分析 外部環境

客観的な特徴や事実

要因（ 地域環境 ）

- ・ 近年，農地の開発が進み，振興住宅地が増えているが，麦や米を作っている田畑も多く残っており，学習環境に恵まれている。

要因（ 地域人材 ）

- ・ 保護者や地域住民が，積極的に協力してくださり，相談したり参加を募ったりしやすい。

要因（ 各種団体 ）

- ・ 学習内容に応じて，町環境課，香川県埋蔵文化財センター，営農集団，農協など各種団体に講話や実技などの授業協力などを依頼しやすい。

支援的にはたらく場合

（ ポジティブなところ ）

- ・ 学校の教育活動に協力的な家庭が多く，校外学習の際には，ボランティアで引率を引き受けてくださったり，行事などの際には，進んで参加して下さったり，児童と共に活動して下さる方々が多い。
- ・ 毎月発行している「学校だより」を見て，ボランティアで，下見をして下さったり，道具を作ってく下さったりして，活動を支援して下さる地域の方々いる。
- ・ 地域の方々の中には，様々な知識に秀でている方々も多く，学習内容に応じて，ゲストティチャーとして参加していただくことができる。
- ・ まだまだ昔からの田園地帯が残っている所も多くあり，稲作栽培活動などの学習が組みやすい。

阻害的にはたらく場合

（ ネガティブなところ ）

- ・ 校区内には，交通量の多い道路が多く，校外学習を行う際には，安全面に十分注意する必要がある。
- ・ 校区内の公共施設が少なく，実際に見学したり，質問したりする活動が組みにくい。
- ・ 町バスの利用回数が限られているため，校区外での学習や施設見学などは，ほとんどできない。
- ・ 協力的だが，学校行事との兼ね合いが無難しいこともある。

私の考えるこれからの実行策

* 自校の外部環境の支援要因でもっと発展させるための活動働きかけや取組は

- ・ 地域人材リストは，作成されているが，活動の幅を広げたり，有効活用したりするためには，支援していただける分野や内容をもう少し細かくまとめていく。
- ・ 現在は，地域人材リストを主に教師が活用しているが，地域人材について児童も学ぶことができるように，児童用も作成していく。

* 自校の外部環境の阻害要因を克服するための解決策は

- ・ 校区内の危険箇所を書き入れた安全マップがあるので，ボランティアで参加して下さった方々も活用できるようにする。
- ・ 学習内容に応じて活用できる地域の公共施設一覧表を作成する。
- ・ 地域の公共施設についてのパンフレットや説明書を集めておく。

自校の把握と分析 内部環境

客観的な特徴や事実

要因（ 年間計画 ）

- ・ 学年ごとに、総合的な学習の時間の年間テーマと学習計画が決まっているので、どの時期に何をしなければいけないかが、はっきりしている。

要因（ クロスカリキュラム ）

- ・ 総合的な学習の時間と各教科、道徳、学活など、年間を通じたクロスカリキュラムを作成しているので、教科などとの関連が図りやすい。

要因（ 教師集団 ）

- ・ 若年教師からベテラン教師まで、年齢層がある教師集団で構成されているので、互いに刺激を受けることができる。

強みとしてはたらく場合

（ ポジティブなところ ）

- ・ 年度初めに年間計画を作成するので、毎月の活動内容計画が立てやすい。
- ・ クロスカリキュラムを作成しているので、各教科、道徳、学活などと関連づけて取り組むことができるので、事前、事後の指導がしやすい。
- ・ 保護者にも案内を出し、各学年の学習成果を発表する場を設けているので、他学年の発表の表現方法から、人に伝えるための技能などを学ぶことができる。また、児童は、次の学年には、どのような学習をするのか期待を持って取り組める。
- ・ 年間活動をポートフォリオのように、ファイルして保存している。教師は、それを見れば、前年度に、どのような活動をしたか知ることができる。児童は、自分の成長に気づくことができる。

弱みとしてはたらく場合

（ ネガティブなところ ）

- ・ 前年度の学習内容を引き継いだり、地域とのつながりも考慮し、学習内容を設定したりしなければならぬ学年もあるので、マンネリ化の要因にもなる。児童が要求している学習内容と温度差が生じる。
- ・ 本当に、児童主体で学ばせたい、体験させたいと思うには、ダイナミックな活動も不可欠であるが、予算不足で活動が不十分である。
- ・ 教師の興味・関心などにも差があり、学習内容との関わり方が不十分なこともある。
- ・ 各学年、学習内容ごとに、評価規準を設定しているが、学習内容や体験に、ふさわしいものかどうか十分に確認できていない評価項目もある。

私の考えるこれからの実行策

* 自校の強みをもっと活用した教育機会や活動、取組は

- ・ 学年団ごとのファイルには、失敗事例も入れておくことで、次年度の教師は、それを自分なりに改善して工夫することができるので、デメリット、失敗事例もファイルしておくようにする。
- ・ 児童に、自分の成長だけでなく、仲間の成長も感じ取らせることができるように、ワークシートに、自己評価、他者評価などの欄を設け、今以上に児童間の相互評価ができるように工夫する。

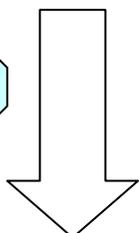
* 自校の弱みを克服するための解決策は

- ・ 教師の意見、児童の意見、相互の意見から互いに求めているものは何かを洗い出し、つけさせたい力に効果的な内容を互いの共通点から見い出し、テーマを設定する。
- ・ 評価規準を設けているが、内容や体験により、その都度、ふさわしいものかどうか見直していく。

総合的な学習の時間プラン

人との関わりを大切にし、生き方を学び、自己の生き方を考えるー

自校の内外環境の分析

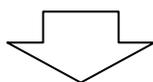


総合的な学習の時間の今日的課題

- ・ねらいの明確化
- ・各教科等との関連の明確化
- ・小中学校を見通した指導計画の策定
- ・学校としての組織体制の構築
- ・学習状況の適切な評価のための工夫
- ・外部人材との連携協力体制の構築 など

めざす児童生徒のすがた

- ・ 認識する力 課題追求し、豊かな感性や人としての生き方を見いだす子
- ・ かかわる力 体験活動を通して、人、ものなどに積極的にかかわり、仲間と共に学び合って高まろうとする子
- ・ 自己内省力 自己の活動をふり返り、よりよい生き方を求める子



重点事項 1 総合的な学習の時間の研修の充実

具体的方策・取組内容

- ・ 総合的な学習の指導法の研修
様々な人間像や生き方に学ぶ教材開発
自己を高める体験活動の開発・・・自発的に他と関わる場の確保
地域の先輩の生き方に学ぶ教材開発や授業実践
生活課題の教材化、本音の出る授業指導法の研修
人の生き方を主題とした教材別単元の洗い出し
- ・ 評価内容の改善、評価カードの充実化
個の変容を捉える自己評価カードなどの改善、開発
・・・ポートフォリオの充実化
個の変容を捉える他者評価の開発と累積・・・個人カルテ
個の変容をより具体的に捉えることのできる教師教科の実施
活動別評価規準の具体化、見直し

指標化・スケジュール化

- ・ 現職教育への位置づけ 年間1本ずつ公開授業を実施する。
他学年の体験活動に教師が参加する。
単元の最初に、教材開発や評価規準設定等の研修時間を確保する。
- ・ 評価カードの作成 学年に応じた評価規準や評価カードの見直しをする。

重点事項 2 年間計画の見直し

具体的方策・取組内容

- ・ テーマ設定
子ども達が要求している内容と、教師が身につけさせたい力の関連性についての協議
体験活動を通して、培いたい力の育成についての協議
- ・ 各教科との関連を図ったクロスカリキュラムの作成
年間クロスカリキュラムの効果的活用と各教科との関連性について協議
他領域への派生效果としての学力調査
- ・ 地域人材活用場の設定
年間の活動内容に応じた地域人材の有効活用について協議
地域人材の確保

指標化・スケジュール化

- ・ テーマ検討 年度末に、学年ごとに子ども達の課題を出し、次年度最初に課題解決のために必要な体験活動や学習内容をまとめる。
- ・ クロスカリキュラムの作成
5月中に年間クロスカリキュラムを作成し、他教科、他領域との関連性を図る。
- ・ 地域人材バンクの作成
年度初めの学校だより等で、地域人材を募集し、学習内容に応じた地域人材活用の計画表を作成する。

重点事項 3 自己の変容が分かる場の工夫

具体的方策・取組内容

- ・ 自己課題の設定
児童一人一人が、自分につけたい力を考え、自己課題について検討する。
前学年の児童による活動内容等についてのオリエンテーションの開催
- ・ 自発的に他者と関わる場の設定
学校内だけでなく、地域、子供会などより多くの人々に触れることのできる場の確保について協議
- ・ 自己評価や他者評価の場の設定
自己の変容、他の変容が分かる評価カードの作成
ポートフォリオによる自己の振り返りを行う時間確保
他者評価の場の設定や評価カードの工夫

指標化・スケジュール化

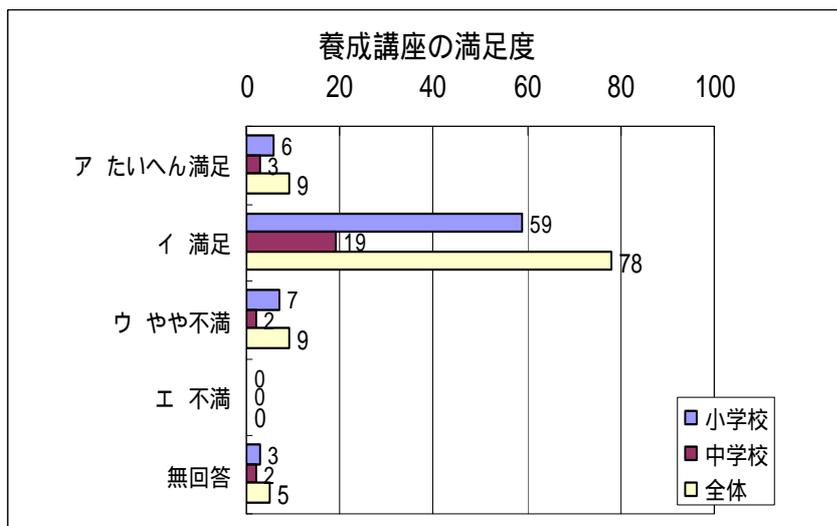
- ・ 自己課題決定 学年当初、学習内容やテーマに即した自己課題を決める。
- ・ 他者との関わりの場への積極的参加
体験活動などでは、地域子供会や幼小、保小、小中連携などを強化し、学びの環境づくりを支援してもらう。
- ・ 互いに認め合う場の確保
体験活動や単元ごとに、友だちの行動、考えから学んだことや自己の気づきを具体的に残せるような、ノートや評価カードを作成する。

平成18年度総合的な学習の時間コーディネート養成講座を受講して アンケート結果の概要

調査日 平成18年11月28日
 対象 受講者 小学校教員 75名
 中学校教員 26名 計101名

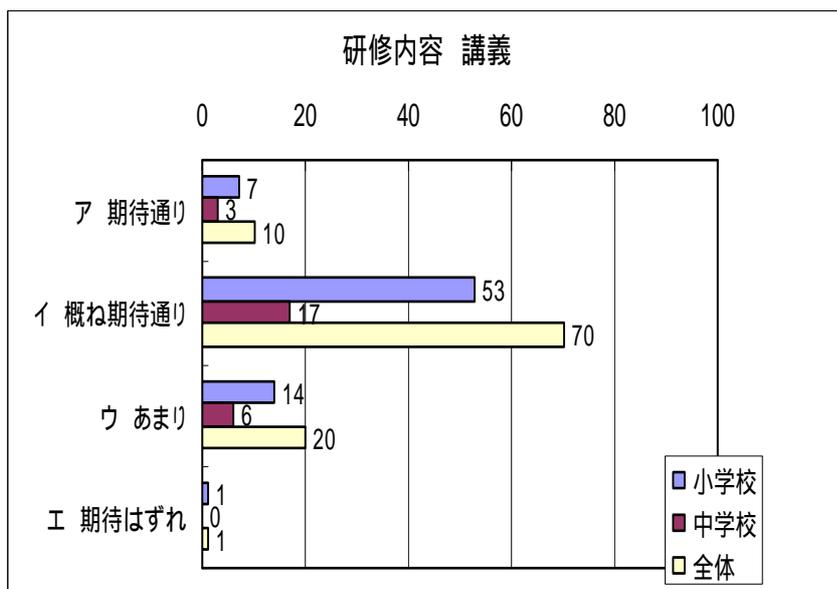
(グラフの数字は、人数を表す)

1 養成講座の満足

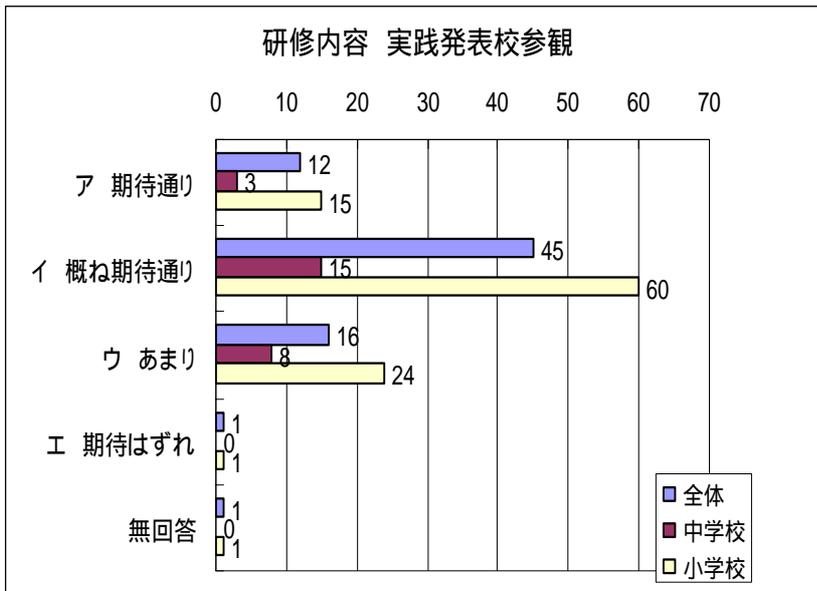


- ・小学校の教員の86.7%、中学校の教員の84.6%が、この講座に満足感を持っている。
- ・総合的な学習の時間の趣旨やその大切さを再認識できるものであったという意見があった。
- ・多様な研修形態がよかった。とくにワークショップは参考になったという意見が多く見られた。

2 研修内容や方法



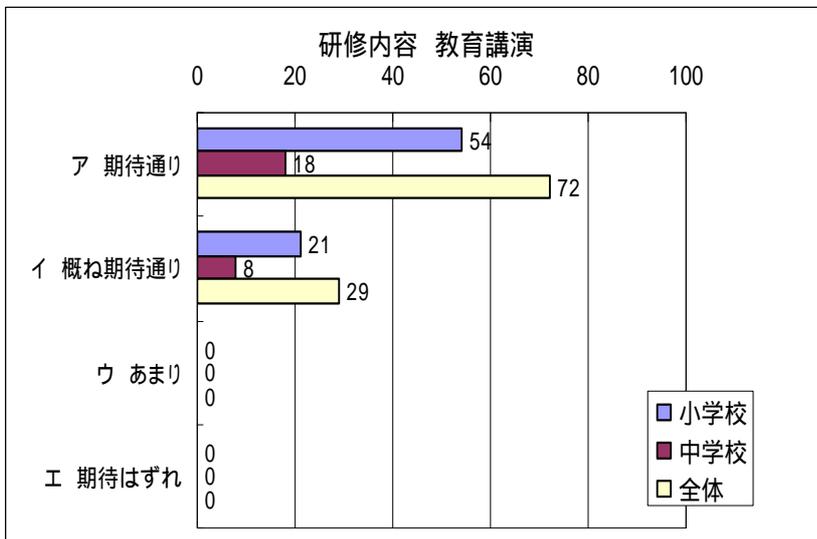
- (1) 講義・
 ワークショップ
- ・小学校の教員の93.3%、中学校の76.9%が「概ね期待通り、期待通り」と答えている。
 - ・ワークショップにより、他校と、また小・中との情報交換ができたのがよかったという意見が多かった。
 - ・中学校の参加人数が少なかったことで、同じ校種間の意見交換ができなかったという意見もあった。



(2)実践発表校参観

(屋島西小学校)

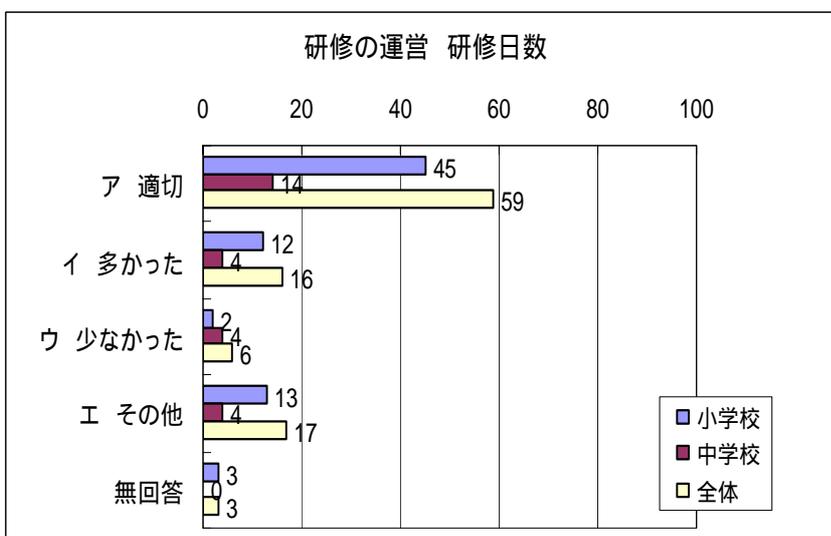
- ・小学校教員の76.0%、中学校教員の69.2%が「期待通り、概ね期待通り」と答えている。
- ・研究の取組状況や授業が参考になったという意見が多く見られた。
- ・特に学習環境づくりが参考になったという意見が多かった。
- ・中学校教員にとっては、小学校を見るのもいい刺激になったようだ。



(3)教育講演

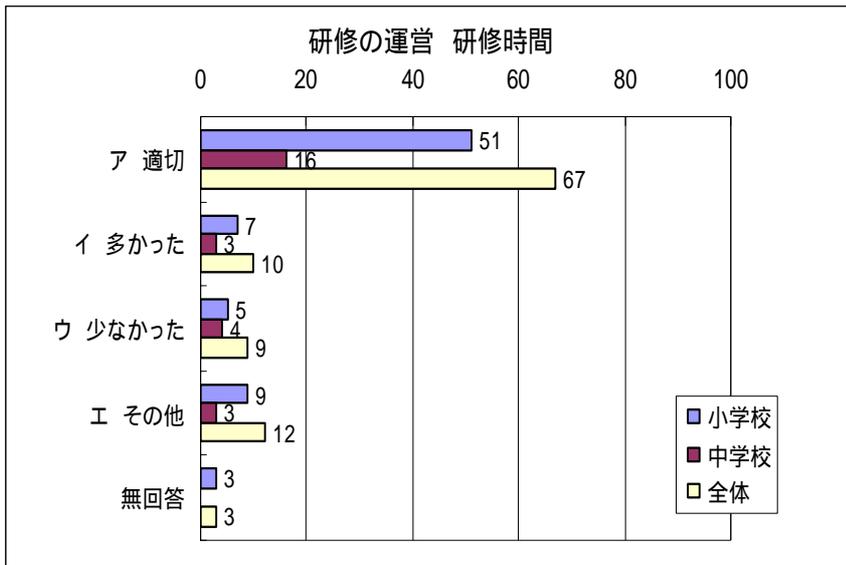
- ・小学校、中学校いずれの教員においても教育講演には満足をしている。
- ・全国の多くの実践例が紹介され、プレゼンテーションによる話が分かりやすかったという意見が多く見られた。
- ・理論、実践、研修方法などが具体的に紹介されてよかったという意見もあった。

3 研修の運営



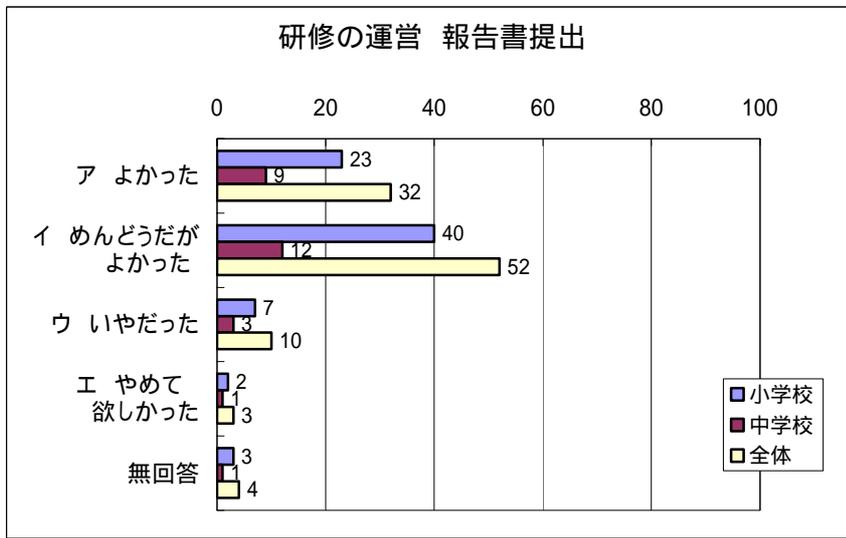
(1)研修日数

- ・小学校教員の60%、中学校教員の53.8%が研修日数を「適切」と答えている。
- ・その他の意見では、日数は適切であったが、実施時期が短期間に集中していたので、学校をあけにくかったというものが多く見られた。
- ・長期休業中の研修にして欲しいという意見も見られた。



(2)研修時間

- ・小学校教員の68.0%、中学校教員の61.5%が「適切」であったと答えている。
- ・午後半日は、適切な時間であったが、開始時刻が早いため、午前中の授業に影響したり、島嶼部の学校に取っては少しきついようであったりした。
- ・半日4回よりも、終日2回の方がよい場合があるのではないかという意見もあった。



(3)研修報告の提出

- ・小学校教員の84.0%、中学校教員の80.8%が「よかった、めんどろだがよかった」と答えている。
- ・毎回A4版1枚程度の研修報告を課したが、比較的好意的に受け入れられた。
- ・研修内容を振り返る上からも研修報告の提出は、意義を認めるものと解したい。

4 今後、コーディネーターとしての取組は

・養成講座を受講して、今後コーディネーターとして取り組みたいこととして多いものは

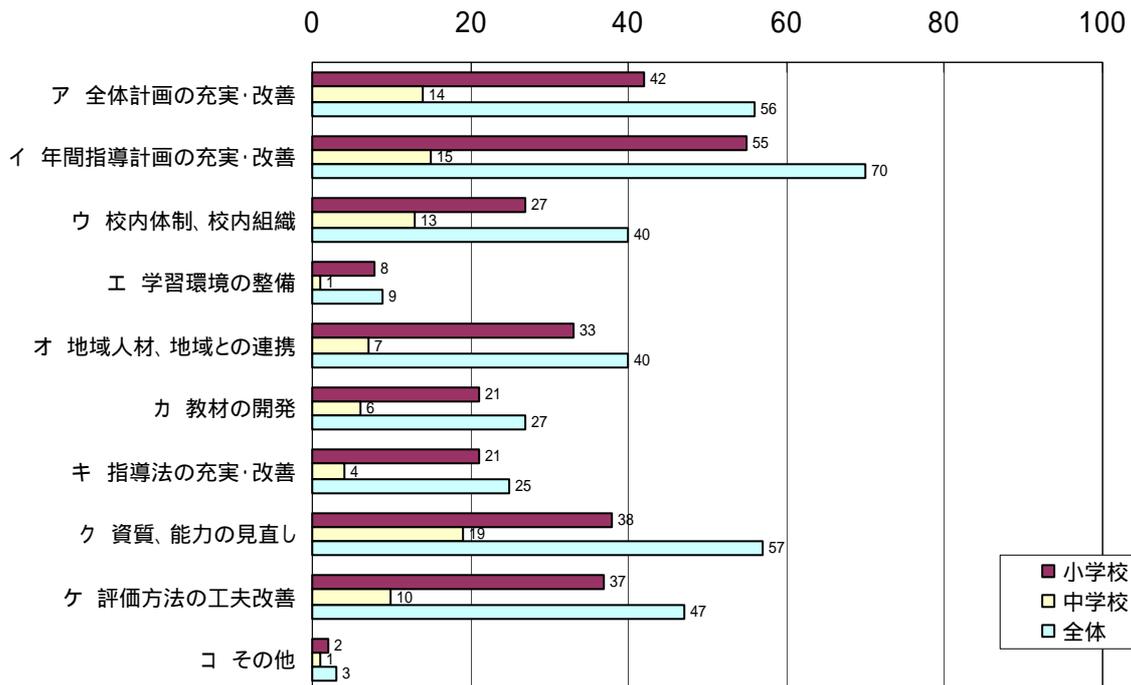
小学校教員：1 年間指導計画の充実・改善
2 全体計画の充実改善
3 資質・能力の見直し

中学校教員：1 資質・能力の見直し
2 年間指導計画の充実・改善
3 全体計画の充実改善

となっている。(次ページ グラフ参照)

・上記以外では、小学校教員が、評価方法の工夫改善、地域人材・地域との連携をあげているのに対し、中学校教員は、校内体制・校内組織、評価方法の工夫改善を取り上げている。教科担任制の中学校では、やはり校内の組織づくりに課題があると感じているものが多いということが推測される。

今後、コーディネーターとして取り組みたいこと



5 養成講座を受けて 小中学校教員の声

小学校教員の声

- ・ 総合的な学習の時間の取組が自分としても、学校としてもマンネリ化し、子どもの力をつけるものとなっていないと考えていたので、今回の研修で総合的な学習の時間の意義を見直すことができた。講演会の中のビデオや映像で自分の力を表現し、力を合わせ伸びていく子どもたちの姿を見て、感動した。総合的な学習の時間の力を感じた。コーディネーターとして学校全体の総合的な学習の時間について見直し、活性化していくようにしたい。
- ・ コーディネーターの役割は、他の職員への働きかけということであるが、校内での立場では、働きかけが難しい。全職員がこのような研修を受けて意識を変える必要がある。
- ・ 総合学習を充実させることは低学力を招くという意識であったが、充実させればさせるほど学力が身に付くような意識になった。目からウロコが取れたような感じがした。
- ・ これから、即、コーディネーターとしてどれだけ取り組めるかということとはなかなか難しいところもある。簡単などころからの取組となるであろうが、できるだけ来年度に向けて役立てられるようにしたい。
- ・ 研修報告を毎回出すのは正直たいへんめんどろだった。しかし、総合的な学習と同じで、もう一度振り返る（自分の得たこと、考えたこと）ことには意義はあった。
- ・ 総合的な学習の時間は、「ゆとりの時間」的に考えている方も多いのでは。私自身もそのように思うことがなかったとは言い切れない。しかし、この養成講座を受講し、荒れていた学習態度や生活態度の学校が総合的な学習の時間で立ち直ったことや、子どもたちが生き生きと取り組んでいる学校の紹介を見て、総合的な学習の時間の可能性や今後の夢も感じさせてくれた。

- ・ 総合的な学習の時間を充実させるために、他の教員たちと意識を共有し、すべての先生方に関わり動いてもらうか、そのための条件づくりをどうするかなど、今後考えていきたい。
- ・ 今、自校の学年の年間計画の見直しをしようとしていたので、参考になることが多くあった。また、学校評価の時期だったので役立てたいと思っている。何を学ばせたいのか、どんな力を付けたいのか等を考えながら、教師も力をつけなければとか、どう教材研究をすればよいのか見直すきっかけになった。
- ・ 自校の総合的な学習の時間に対し、改善の方法や方向性を自分なりに模索していたところでの本講座でしたので、その方策に対するアドバイスや指針をいただいたようでありがたかった。ただ、個人の力だけでは動きにくい分野ですので学校としての協力、協働がどれくらいできるのか来年在らな反面、心配なところもある。

中学校教員の声

- ・ 学習指導要領の改訂により総合的な学習の時間がなくなるという意見や、総合を軽視する傾向があるが（特に中学校では）そうでないことがはっきりした今、やらなければいけないのであるならば、総合的な学習の時間本来の姿に立ち返り、生徒の力を十分に伸ばしてやりたい。また、同僚にその旨をどんどん伝えていくことが役割と感じている。
- ・ 今まで何のためにするのか（意義はある程度分かるが、教科の時間を減らしてまでするのは何か）疑問であった。総合的な学習の時間の価値が分かり、これから何をすればよいのかも分かってたいへん意義があった。ただ、まだ、反対する人もあり。同僚にどう話していくかが課題である。
- ・ 中学校での総合的な学習は時間的な制約があり、大変である。この養成講座を受けて、ますます大変で教師の負担が大きくなると思った。反面、生徒たちの大きな成長のきっかけになる総合的な学習の時間であるとも強く思うようになった。現状を大きく変えることはできないが、できる範囲でより充実した学習ができるようにしていきたいと思う。生徒たちの意識の流れに沿った学習が展開できるよう学年団で話し合っていきたい。
- ・ 今回の養成講座で学んだことを、今後の実践の中で生かしていきたいと思うが、そのためには、学校全体（県全体）で推進する姿勢が大切だ。勤務校の校種、生徒の実態、地域の課題などによって事情が異なるので、その勤務校の職員の共通理解を得ることが何よりも重要である。コーディネーターの養成とともに、それを支える周囲の条件づくりも進めていかなくては、本当に実のある研修にはならない。
- ・ 総合的な学習の時間がもつ意義、教育的効果、生徒の主体的学びの重要性などが、よく理解できた。実践の積み重ねが人間の成長に大きく影響することも知ることができた。しかし、これをどう自校で具体的にマネジメントしていくか大きな課題を与えられた感じがする。4日間ではなかなかコーディネーターとして役に立てる力もついていないが、少しでも来年度に生かしていきたい。